

浅川扇状地遺跡群

とくまほんどうはら
徳間本堂原遺跡(2)

一般県道長野豊野線道路改良事業（東徳間～西三才地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2015年3月

長野市教育委員会

浅川扇状地遺跡群

とくまほんどうはら
徳間本堂原遺跡(2)

一般県道長野豊野線道路改良事業（東徳間～西三才地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2015年3月

長野市教育委員会

序

埋蔵文化財は、「土地に刻まれた歴史」といわれ、遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、当時の人々の生活を今に伝え、郷土の成り立ちと文化を理解するうえで重要な役割を持っています。

善光寺平に位置する長野市には、数多くの遺跡が周知されていますが、この中で、開発事業により保存が困難であるものについては事前に発掘調査を行い、記録保存という形で後世に残していく手段がとられています。

ここに長野市の埋蔵文化財第139集として刊行いたしました本書は、徳間地区において、道路の拡幅工事に伴い行われた発掘調査の成果をまとめたものです。狭い調査範囲ではありましたが、弥生時代を中心とした多くの遺構と土器が確認されました。

地域の歴史の記録として、このような発掘調査の成果をご活用いただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対し深いご理解とご協力を賜りました関係各位、また発掘調査に際してご協力をいただきました皆様に御礼申し上げます。

平成27年3月

長野市教育委員会
教育長 堀内 征治

例 言

- 1 本書は、道路改良工事に伴い、記録保存を目的として平成25年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、長野県長野建設事務所所長小林睦夫と長野市長鷺沢正一（～平成25年11月10日）及び加藤久雄（平成25年11月11日～）との埋蔵文化財発掘調査委託契約書に基づき、長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）直轄事業として実施した。委託事業名は以下のとおりである。
25年度分委託業務の名称：一般道長野豊野線道路改良事業に伴う平成25年度埋蔵文化財発掘調査委託
26年度分委託業務の名称：平成25年度防災・安全交付金（道路）事業に伴う調査業務委託
履行場所：（一）長野豊野線 長野市三才
- 3 調査地は長野市大字徳間1068-2他に位置する。
- 4 発掘調査は、平成25年11月13日～12月2日、平成26年1月8日～2月14日に実施し、調査面積は約380㎡である。
- 5 基準点測量および遺構測量は平面直角座標系の第Ⅷ系（日本測地系2000）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「A T S」のうち、光派測距儀を用いた「コーディック・システム」を援用するため同所に委託した。
- 6 遺構図は、全体図を1：200、遺構個別図を1：80縮尺に統一してあるが、微細図その他については適宜縮尺を示した。
- 7 土器は、接合後全体および部位で1／2以上あるものを基準に選別をして実測を行い、図版を作成した。
・遺物実測図の縮尺は、土器が1：4、石器が1：2および1：3、土製品が1：3である。
・土器実測図の赤アミかけは、赤彩を示す。
- 8 本書は、I-1を飯島、以下を遠藤が担当した。
- 9 調査によって得られた出土遺物および諸記録は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにて保管している。なお、遺跡の略記号は「AHDHⅡ」である。

目次

序

例言

I 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	3
3 調査体制	4
II 遺跡周辺の環境	5
III 調査の成果	7
1 調査概要	7
2 遺構	12
3 遺物	20
1 土器	20
2 石器	28
3 土製品	28
IV まとめ	29

遺物写真

挿図目次

図1 調査区位置図	1	図12 S B 7・8・13実測図	15
図2 調査地位置図	2	図13 S B 9・10・11・12・14実測図	17
図3 周辺遺跡位置図	6	図14 S D 1・2実測図	19
図4 調査区位置図	7	図15 土器実測図 (S B 2・3)	21
図5 全体図	8	図16 土器実測図 (S B 3・6・8)	22
図6 調査区北壁層序図	9	図17 土器実測図 (S B 8・9・11)	23
図7 S B 2実測図	12	図18 土器実測図 (S B 11)	24
図8 S B 2床面土器出土図	12	図19 土器実測図 (S B 10・12・14・検出他)	25
図9 S B 3・4・5実測図	13	図20 石器実測図	28
図10 S B 6実測図	14	図21 土製品実測図	28
図11 S B 6上面石実測図	14		

表目次

表1 遺構表	11	表3 石器・土製品観察表	28
表2 土器観察表	26		

I 調査経過

1 調査に至る経過

調査地のある長野市徳間地籍は、市街地に程近い長閑な田園地帯であったが、昭和63年から着工した約45haに及ぶ大規模な区画整理事業によって郊外型の住宅地へと変貌した。郊外型のロードサイド店舗が軒を連ねる都市計画道路東豊線に接続する一般県道長野豊野線は、豊野町や飯綱町と長野市街地をつなぐ重要な幹線として、朝夕を中心に交通量の多い路線であった。県道長野豊野線の改良事業に関する長野県長野建設事務所との保護協議は平成20年度に遡る。折りしも長野市立阜月高校（現：市立長野高校）の全面リニューアル事業とも関連し、J R信越線三才駅付近から道幅を広げながら都市計画道路東豊線に直結するまでの大規模な事業である。長野市教育委員会では、予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である徳間本堂原遺跡の範囲内であることから、平成15年8月13日及び平成18年5月26～28日に実施した市立長野高校建設事業に伴う試掘調査によって得られた徳間本堂原遺跡の推定範囲に基づき、拡幅歩道となる箇所平成22年5月12日に試掘調査を行い、良好な埋蔵文化財の包蔵を確認した。その後協議を重ねる中で、今回の開発事業の全体を包括する埋蔵文化財の保護措置について平成25年3月18日付で「埋蔵文化財に関する協議書」を締結した。

その後、工事の進捗状況により市立長野高校の北側部分の工区が先行されることとなり、平成25年9月4日付で文化財保護法第94条の規定に基づく通知が長野県長野建設事務所長から提出され、同月6日付25埋第3-18号にて長野市教育委員会より発掘調査の実施を勧告した。協定書に基づき、発掘調査を実施する範囲は北側の歩道新設部であり、平成25年11月13日から中断期間をはさみながら翌年2月1日まで現場における発掘作業を行い、翌年度に整理作業を実施し、平成27年3月本書を刊行した。立会い工事と現道部分は、平成26年1月27日及び2月10日に夜間の工事立会いを行って、当該工区における保護措置をすべて終了した。



図1 調査区位置図 (S = 1:2000)



調査地周辺航空写真（平成2年6月撮影（株）ジャステック）

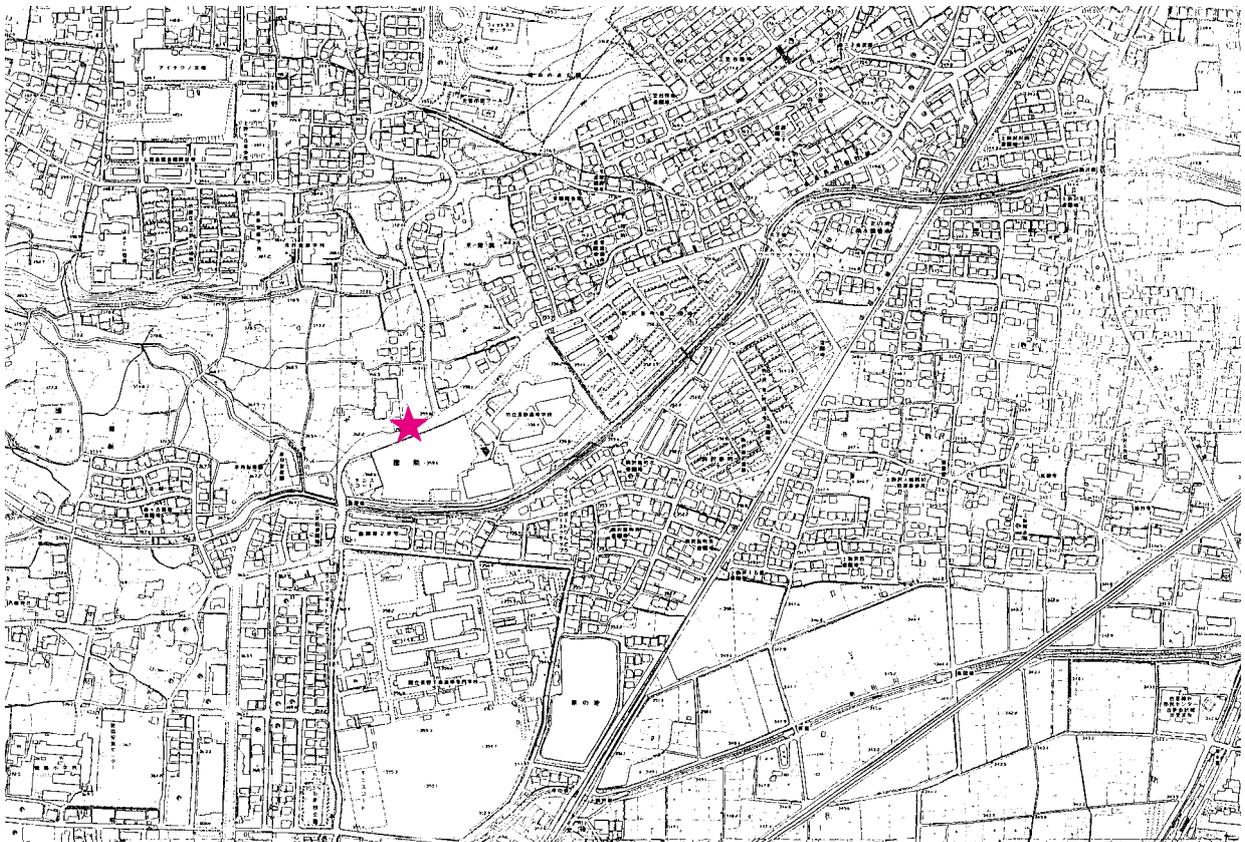


図2 調査地位置図（S = 1:10000）

2 調査の経過

A区（平成25年）

- 11月13日 重機による表土除去作業。現地表面より1m下で検出面となる。
- 11月14日 作業員参加により調査開始。全体に水がつくため排水溝を掘る。
- 11月19日 排水作業後、検出。
- 11月20日 検出作業。西側SD掘り下げ開始。
- 11月21日 SD1・2、SB2・3掘り下げ。土器多い。
- 11月22日 SD、SB掘り下げ。SB2・4付近を中心に排水作業。
- 11月26日 調査区全体排水作業。遺構掘り下げ、いずれも深さがあり、床面の確認ができない。
- 11月27日 SB2床面土器検出。SB4完掘。ほか遺構掘り下げ。
- 11月28日 午前、遺構掘り下げ。午後、測量。
- 11月29日 測量図結線。市立長野高校日本史選択生徒・教員見学（午前）
- 12月2日 調査区全体、遺構個別写真撮影。

B区（平成26年）

- 1月8日～ 重機による表土除去作業開始。
- 1月15日 作業員参加による調査開始。
- 1月16日 検出作業。遺構確認トレンチ設定。
- 1月20日 トレンチより遺構の確認。掘り下げ。調査区北側に遺構が集中。
- 1月21日 SB6（A区続き）掘り下げ、石を確認。
- 1月22日～ 遺構（SB）確認、掘り下げ。切り合いが多く、いずれも掘り込みが深い。
- 1月29日 SB10完掘。SB10下より別遺構確認。
- 2月3日 SB掘り下げ。床面確認なし。
- 2月6日 SB8完掘、SB6床面確認。
- 2月7日 調査区北壁図面作成、写真撮影。
- 2月10日 前日までの雪により、雪（氷）除去作業。SB10～12完掘。
- 2月12日 調査区全景・遺構個別写真。午後、測量。
- 2月14日 図面作成、片付け。現場での作業終了。



A区表土除去作業（西から）



A区作業風景（西から）



B区作業風景（西から）



B区作業風景（東から）

3 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として長野市埋蔵文化財センターが実施し、その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	堀内征治	
調査機関	文化財課	課長	青木和明	
	埋蔵文化財センター	所長	小山敏夫	
	庶務担当	係長	河口英明（～H25）	竹下今朝光（H26～）
		事務職員	大竹千春	
	調査担当	係長	飯島哲也（調査員）	
			風間栄一（H26～）	
		主査	小林和子	
		主事	塚原秀之（～H25）	
		専門員	柳生俊樹	高田亜紀子
			平林大樹（～H25）	田中暁穂
			遠藤恵実子（調査員）	日下恵一
			篠井ちひろ	清水竜太（H26～）

発掘調査員 山本賢治

発掘作業員 江守久仁子 大谷盛孝 岡沢貴子 駒村文男 杉本千代 諏訪里子 中村洋一
増山 聡 村田岳仁 森はる美

整理調査員 青木善子 鳥羽徳子 武藤信子

整理作業員 清水さゆり 関崎文子 西尾千枝 待井かおる 三好明子

遺構測量委託 株式会社写真測図研究所 代表取締役 杉本咲子

重機賃貸借

久米路建設株式会社 代表取締役 澁澤茂明



発掘調査参加者

Ⅱ 遺跡周辺の環境

徳間本堂原遺跡は長野盆地の北西部、長野市の北西部に位置する飯縄山を水源とする浅川の堆積作用によって形成された浅川扇状地上にあり、扇状地の北辺で浅川と並流する駒沢川の濫原とされる若槻丘陵の南側の緩傾斜地に位置する。

浅川東条を扇頂に南は裾花川扇状地と接し、扇端は東方に伸び千曲川氾濫源の後輩湿地に接する広大な浅川扇状地には数多くの遺跡が存在しており、「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。

浅川扇状地において明確な遺跡が確認されるのは縄文時代からであり、以後、弥生時代中期から本格的な集落の展開がみられるようになる。この後の古墳時代では、前期では遺構が減少する傾向がみられるものの、5世紀後半代の地附山古墳群の築造に関わる集落とされる本村東沖遺跡例をはじめ、中期を中心に平安時代まで各時代の集落が広く展開している。

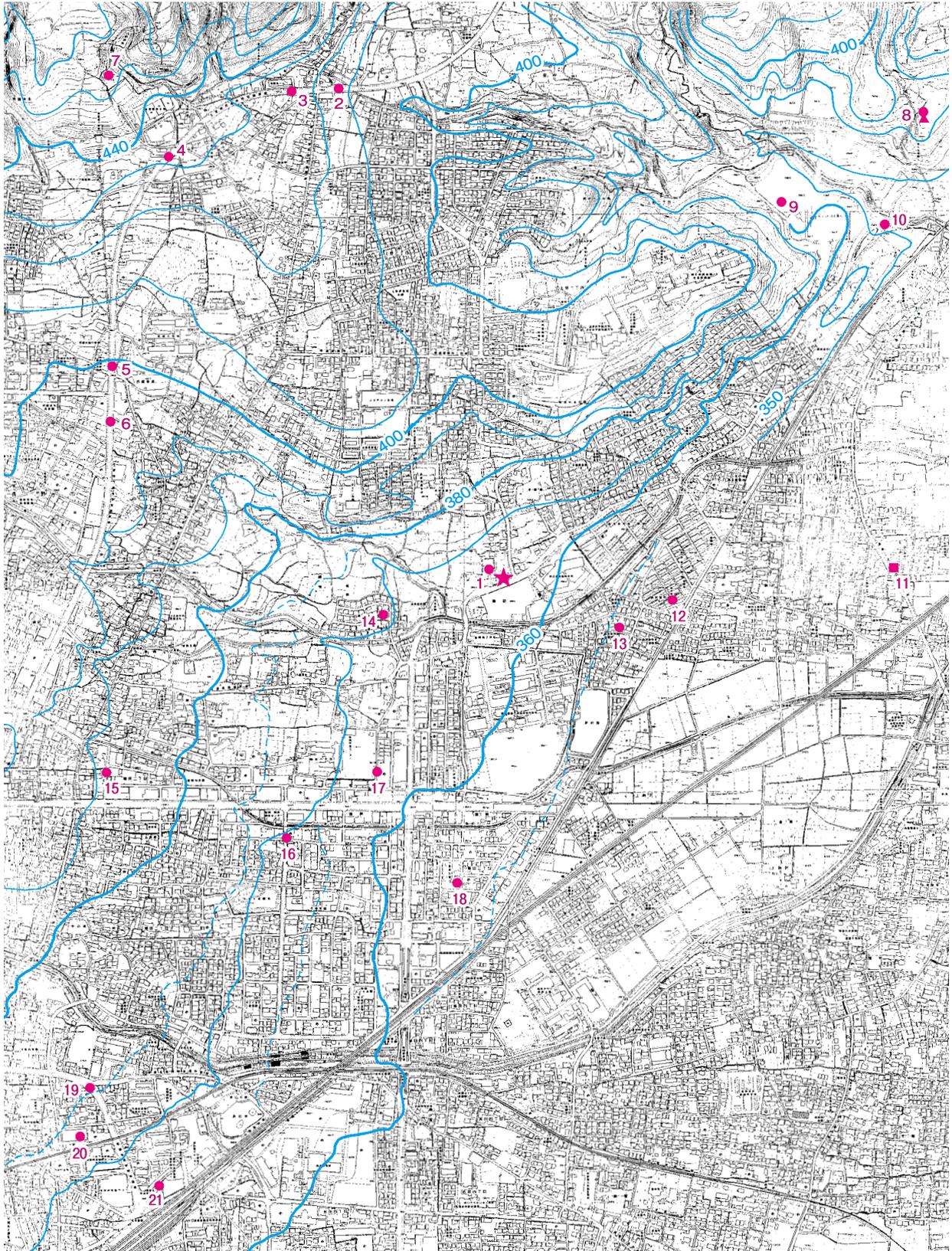
本遺跡は浅川扇状地の扇央に位置し、周辺には多くの遺跡が分布している（図4）。牟礼バイパスA地点遺跡にて縄文時代前期前葉の住居がつくられるのをはじめ、浅川扇状地遺跡群において集落が大きく展開しはじめる弥生時代中期の遺構は牟礼バイパスD地点・二ツ宮遺跡・本堀遺跡にみられる。ここでは本堀遺跡にて中期栗林式期の良好な出土一括資料のある住居が確認されるなど、牟礼バイパスD地点遺跡を含め広く展開する様子が見られる。また、二ツ宮遺跡では中期終末まで存在した後、一時断絶するものの後期に入ってから比較的大規模な集落が形成され、徳間本堂原遺跡（1）では、住居とともに礫床墓・土器棺墓がみられる。

古墳時代で最も多く遺跡が展開する中期には、牟礼バイパスB地点遺跡・二ツ宮遺跡があり、二ツ宮遺跡では前期の住居跡の検出はなく遺構が希薄であるが、中期になると集落が展開し始める。中期では住居のほかに、500個をこえる土師器と大量の白玉・勾玉などが出土した祭祀遺構を持つ駒沢祭祀遺跡、徳間本堂原遺跡では墳丘が削平された円墳があり、古屋敷遺跡や駒沢新町遺跡などをはじめとした周辺の遺跡との集落と墓域・祭祀場とのかかわりが考えられる。

このほかにも、三登山一帯には中期末の三才前方後円墳があり、その付近には三才田子遺跡・籠沢遺跡が位置する。籠沢遺跡では、縄文時代から三才前方後円墳の造営時期をふくめ、長期にわたる大規模な集落が確認されている。

古墳時代後期から平安時代は、牟礼バイパスB・C・D地点遺跡や二ツ宮遺跡があり、引き続き継続して集落がみられるが、中期までのような大規模な展開の様子はみられない。この中で、三才田子遺跡では掘立柱建物や円面硯が出土しており、官衙址または東山道多古駅と推定されている。

これよりもやや離れた位置にある吉田町東遺跡・吉田古屋敷遺跡とその周辺の遺跡においては、縄文時代中期からの住居がつくられ、後期には柄鏡式とみられる敷石住居が確認されている。弥生時代中期から続いていく集落は、古墳時代前期には一時衰退するものの、この時期には前方後方形と考えられるものをはじめとした周溝墓がつくられている。その後中期からはまた広く集落を展開させ、その後は平安時代まで連続して営まれている。地理的に上記の遺跡とは異なる集落であるが、遺跡は同じ展開となっている。



- 1：徳間本堂原遺跡 2：牟礼バイパスE地点遺跡 3：牟礼バイパスD地点遺跡 4：牟礼バイパスC地点遺跡
 5：牟礼バイパスB地点遺跡 6：牟礼バイパスA地点遺跡 7：うまやくぼ古墳群 8：三才前方後円墳 9：籠沢遺跡
 10：三才田子遺跡 11：駒沢城跡 12：駒沢祭祀遺跡 13：駒沢新町遺跡 14：古屋敷遺跡 15：稲添遺跡 16：本堀遺跡
 17：柳田遺跡 18：ニッ宮遺跡 19：吉田町東遺跡 (2) 20：吉田古屋敷遺跡 (5)
 21：吉田古屋敷遺跡 (3) 星：徳間本堂原遺跡 (2)

図3 周辺遺跡位置図 (S=1:15000)

Ⅲ 調査の成果

1 調査概要

調査区は南北方向が狭く、東西方向に延びる長細い形である。遺構はこの中で東西方向はほぼ全体に、南北方向では北側に集中して検出された。周囲の状況からも遺構は北側に展開し南側ではみられなくなるものと考えられる。遺構の数は多いが調査区が狭いため、検出は一部のものがほとんどとなっており、全体の様子を把握できたものはない。調査区内では重機による表土除去作業時から水が湧いていたが、調査区が狭いことから排水が可能な規模の溝を設定することができず、常に水が湧いている状態での作業となった。

全体に検出面からの掘り込みが深く、ほとんどの遺構の覆土中からは土器が多く出土している。なお、検出面の高さは、西から東に向かって下がっている。

遺物は土器と石器、土製品である。土器は弥生時代中期・後期が大半を占める。土器の出土量は調査範囲からみても特に多いが、そのほとんどが破片であり、接合できたものは出土量に比べて少ない。この他の時期の土器も出土しているが、遺構の時期を示すものとしてはほとんどみられない。

〈A区〉

弥生時代から古代までのものを検出した。住居跡は4軒、調査区北側に位置し、調査区外側に広がっていることから、ここでは南端を検出したのみである。時期は弥生時代中期から後期である。

西端には溝が2条あり、確認できたのは一部であるが、2条がほぼ平行するかたちでほぼ東西方向を向く。弥生から古代の土器が出土しており、長い期間機能していたことがうかがわれ、自然地形に合わせてつくられた可能性が考えられる。

〈B区〉

住居のみで9軒を検出、調査区中央で特に遺構が重複している。掘り込みは深いもの（SB11）で検出面から約100cmを測る。重複により上面と下面に分けられるが、下面の遺構は、覆土に礫石を多く含むなどほかと違う様相がみられる。なお、A区から続く住居（SB6）では、覆土中に大型の石が多く入っていた。時期は遺構よりも新しく、意図的に入れられたものである。

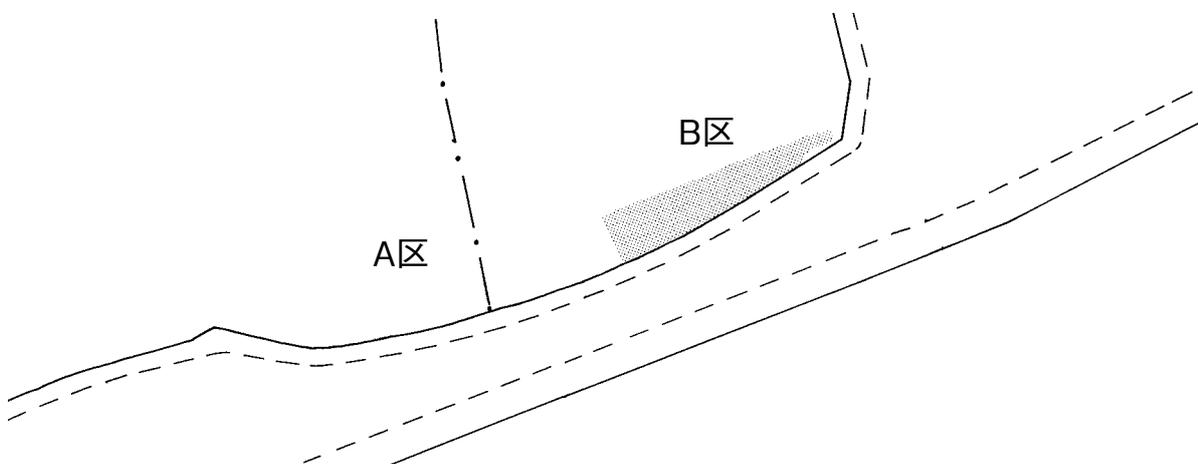


図4 調査区位置図 (S=1:800)

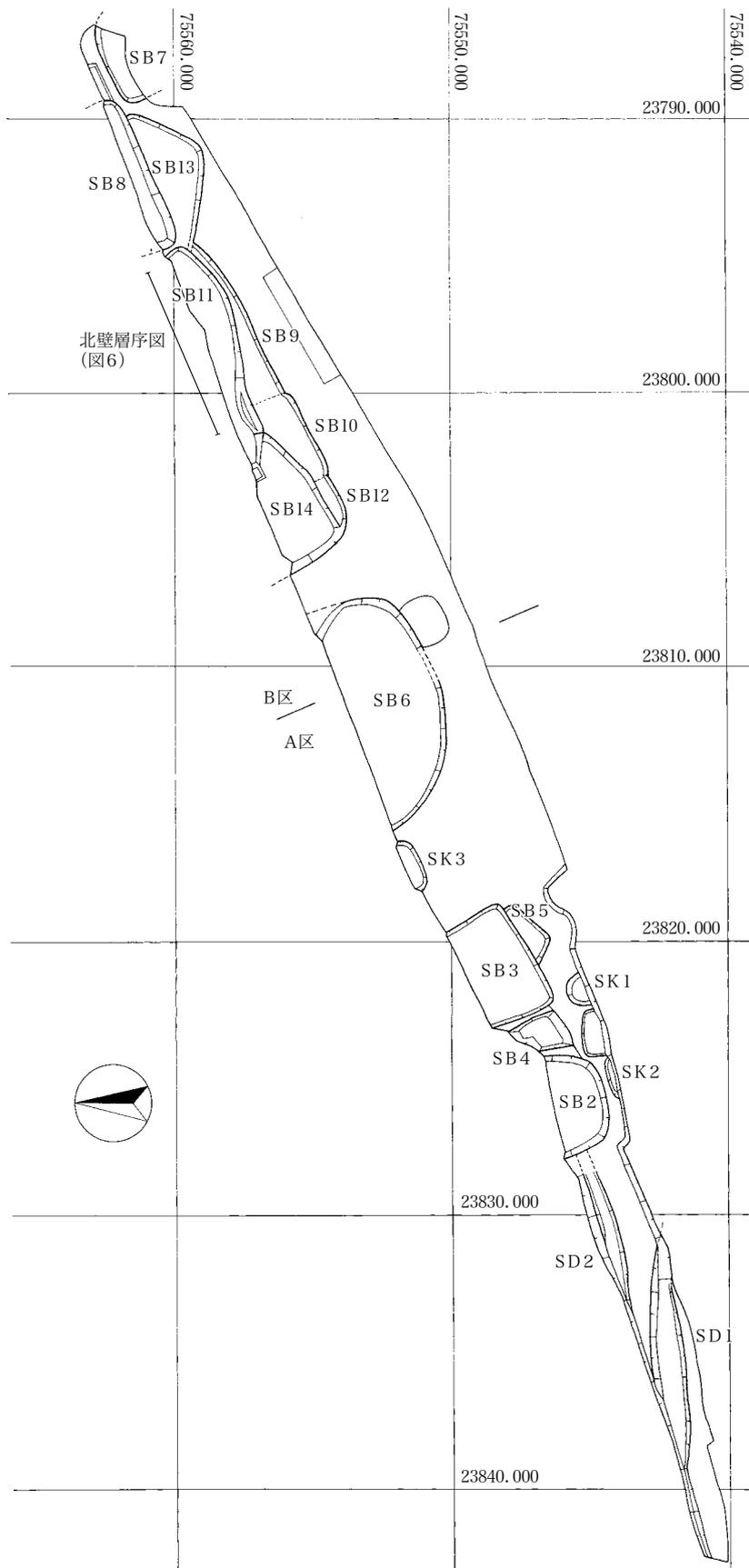


图5 全体图 (S=1:250)

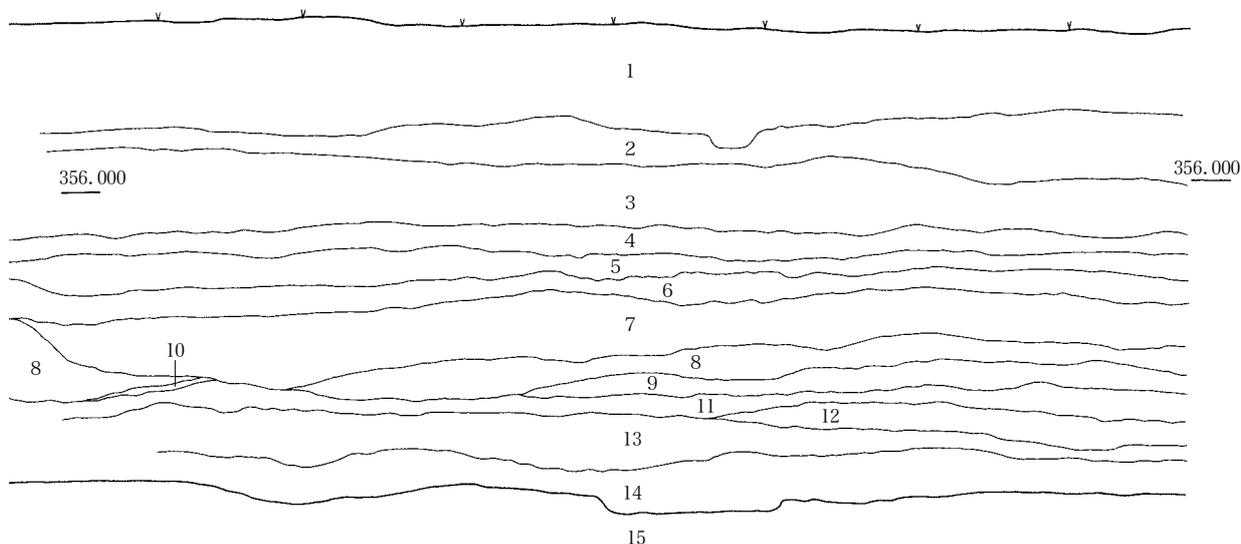
調査区層序

B区北側壁面の遺構が集中する部分（図5）で層序の確認を行った。現地表面から遺構最下層のSB11底面までは約250cmの深さである。

本調査での遺構検出面は現地表面から150cm下（7層上面）で、その上の5・6層が包含層である。土質はほぼ同じであるが5層よりも6層の方が色調が濃く、土器が多く入っている。7層は上面の遺構（SB9・10）の覆土にあたり、下面の遺構（SB11・12）の検出面である第8層以下から礫石を多く含む層となる。10層は白色の砂層で調査区内の所々にみられるが、範囲はわずかで遺物を含まない層である。11層からはSB12の覆土であることから土器の出土が多くなり、14層までが遺構覆土、15層上面が床面である。SB12覆土（11層以下）は土器の量の変化はみられないが、黒褐色の砂層と礫層が交互に堆積しており、ほかの遺構とは異なった様相を呈する。



調査区北壁（南西から）



- | | |
|--------------------------------|---------------------------|
| 1層 盛土 | 10層 白色砂層：鉄分を含む、土器なく、一部に堆積 |
| 2層 茶褐色土層：鉄分をやや含む、しまりのある | 11層 黒褐色砂層：下面遺構（SB11）覆土 |
| 3層 黒色土層：本調査とは別の包含層（珠洲出土層） | 12層 暗褐色礫層：5cm未満の礫を含む |
| 4層 茶褐色土層：黄色のブロックを含む（4～6層鉄分を含む） | 13層 暗褐色砂層：しまりのある黄褐色土を含む |
| 5層 暗茶褐色土層：しまりのある土層 } 包含層 | 14層 黒褐色礫層：大きいもので10cmの礫を含む |
| 6層 黒褐色土層：しまりのある土層 } 包含層 | (10層～14層：遺構覆土) |
| 7層 黒褐色土層：上面遺構（SB9他）覆土 | 15層 茶褐色礫層 |
| 8層 黒褐色土層：礫（5～10cm大）（8層から礫を含む） | |
| 9層 茶色土層 | |

図6 調査区北壁層序図（S=1:40）



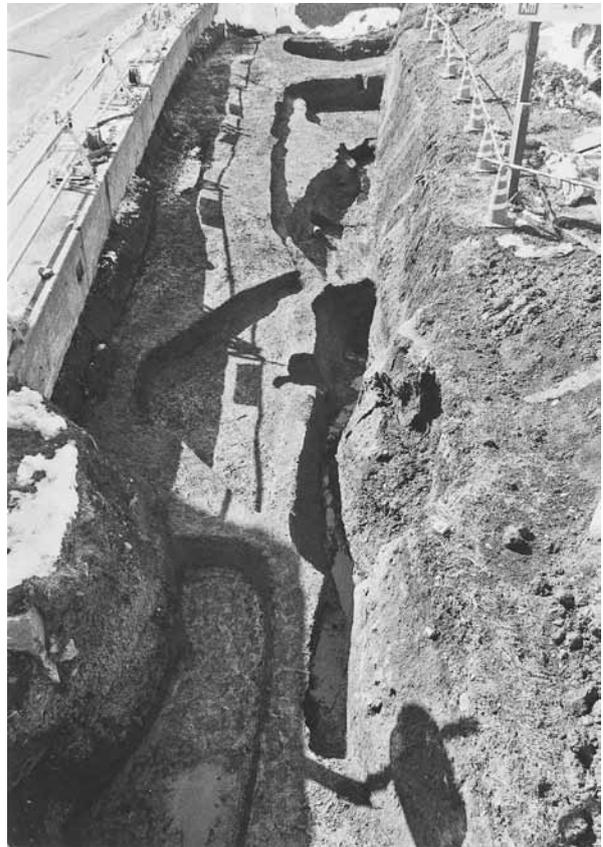
A区全景（西から）



A区全景（東から）



B区全景（西から）



B区全景（東から）

表1 遺構表

遺構名	時 期	遺 構				土 器		その他 遺 物
		平面形 (規模 m)	検出率	施設・主軸・重複 ほか	個別 図版	出土量 (g)	実測数 図 版	
SB1	(欠 番)							
SB2	弥生中期	楕円形 (一×3.8)	1/3	床面土器	図-7 図-8	21,150	10 図15-1~10	石鏃 (図20-2)
SB3	弥生後期	方形 (一×3.9)	1/3	SB4・5を切る	図-9	30,600	15 図15-11~19 図16-20~25	
SB4	弥生後期	方形	1/5	SB3に切られる	図-9	2,600	2 図16-26~27	
SB5		方形	一部	SB3に切られる (住居以外?)	図-9	170		
SB6	弥生中期	楕円形 (一×8.6)	1/2	A・B区で半分ずつの検出	図-10 図-11	31,760	14 図16-28~41	土製円板 (図21-1)
SB7		隅丸方形	1/5		図-12			
SB8	弥生後期	(長)方形 (一×5.8)	一部	SB11・13を切る	図-12	14,780	8 図16-42~48 図17-49	
SB8・9						3,320		
SB9	弥生後期	方形	一部	SB11に重複、SB10に切ら れる	図-13	24,085	10 図17-50~59	土製円板 (図21-2)
SB9・10						2,540		
SB9・10・12						2,560		
SB9・11						3,150		
SB10	弥生後期	方形 (一×3.4)	1/3	SB11・12~14に重複	図-13	9,740	4 図19-87~90	
SB10・12						940		
SB11	弥生中期	円形	一部	住居以外の遺構の可能性も ある	図-13	48,385	27 図17-60~68 図18-69~86	土製円板 (図21-3)
SB12	弥生後期	方形	1/3	SB10の下面より検出 SB14を重複	図-13	14,190	3 図19-91~93	(黒曜石)
SB13		方形	1/3	SB8に切られる	図-12	1,305		
SB14	弥生中期	(楕円形) (一×5.4)	一部	SB12の下面	図-13	20,180	6 図19-94~99	磨製石斧 (図20-1) (黒曜石)
SD1	弥生中期 ~古代	(幅:1.0)	一部	東西方向 S D2と隣接、平行する	図-14	13,700	4 図19-100~103	
SD2	弥生中期 ~古代	(幅:0.66)	一部	東西方向 S D2と平行	図-14	1,260		
トレンチ						4,895	1 図19-104	
検出面 (A区)						6,120		
調査区溝						1,905	1 図19-105	
検出面 (B区)						8,805	2 図19-106・107	

計：268,140 g

2 遺 構

・SB2

住居跡の中では西端に位置する。SD2に接し、検出時は遺構上に旧洗濯機の土台が入っていたことから、湧いてくる水がはけずに溜まった状態での掘り下げとなった。

全体の1/3ほどの検出で、平面は楕円形とみられ、検出できたところで幅3.8m。覆土中からは壺を中心に形の残る土器が出土した。床面に接して上半分の大型の壺が置かれていたが、付近での焼土などの確認はない。

このほかに覆土中から打製石鏃（図20-2）が1点出土している。

掘り込みの深さは43cm、床面は硬く明瞭であるが、柱穴など住居に伴う施設の確認は調査範囲内ではみられなかった。

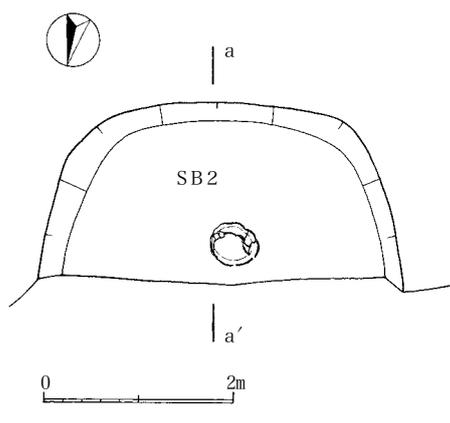


図7 SB2実測図 (S=1:80)

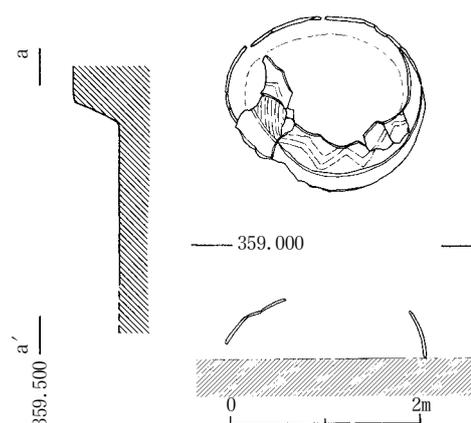


図8 SB2床面出土土器実測図 (S=1:20)



SB2 (北から)



SB2床面土器出土状況 (南から)

・SB3・4・5

SB4は検出状況の良好なSB2と3の確認後に掘り下げたため、すべての遺構に切られる形となり、ごく一部の検出で規模は不明、掘り込みは35cmを測る。SB5はSB3に切られることから一部の検出で、ほかの住居跡よりも掘り込みが浅く、出土土器も僅かである。いずれも平面形は方形および長方形とみられ、炉などの遺構に伴う施設の検出はなかった。

SB3は、検出面からの掘り込みが65cm、平面形は（長）方形で幅（東西方向）が3.9m。覆土下層から床面にかけて特に土器が多く出土し、床面では完形の鉢（図15-17）が出土している。床面は硬くしまり良好な状態であるが、上面で一部焼土がみられたのみで、柱穴などの確認はできなかった。炉の検出はなく、住居北側に位置しているものと考えられる。

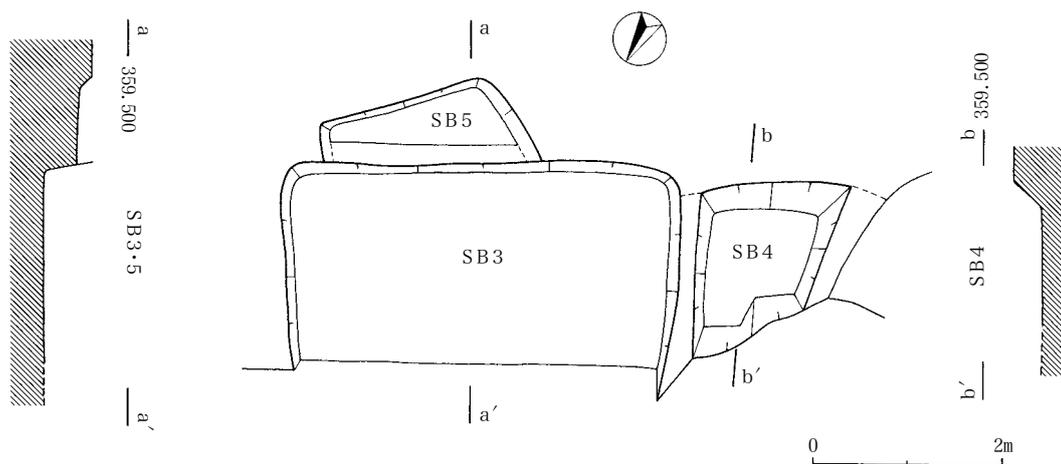


図9 SB3・4・5実測図 (S=1:80)



SB3・5(北から)



SB4(北から)

・SB6

A区とB区に分けての検出となった。遺構全体の1/3ほどの検出であるが平面形は楕円形とみられ、調査区北壁で長さ約8.6mを測る。

遺構掘り下げの際、A区では東壁面から30cm大の石が3点ほど検出された。いずれも床面よりは高い位置にあったことから混入したものと考えていたが、B区では遺構範囲内から140cmの大型の石が検出された。(図11) 検出の高さは検出面とほぼ同じで、この周囲からは大きいもので50cm、ほか15~30cm大の石が集中していた。一番上の大型の石は検出面よりやや高い位置から下は床面よりやや高い約65cmの深さまで入っていた。石に混じり須恵器片がみられ、SB6の範囲内のみにあることから遺構の廃棄後に入れられたことが推測される。断面からは石を組むなどの意図的な様子は確認されなかったが、調査区外北側にも広がっていることから、別遺構の可能性も考慮される。

遺構の深さはB区で75cm。A区ではこれよりも高く掘りきれいでなかったものである。A区では覆土は礫石のみられない黒褐色であるが、B区では石のある所を中心に礫石が多く混じる。床面は明るい黒褐色に砂層が一部入り、水がつくこともありしまりはなく軟弱である。上部の石の影響から覆土中の土器の時期の幅が広い。覆土中から床面にかけて土器の出土量は多いが、遺構の時期を明確にする状態ものはみられない。この他には石の下、床面直上から土製円板(図21-1)が出土している。



SB 6 (A区) (北から)



SB 6 (B区) (西から)

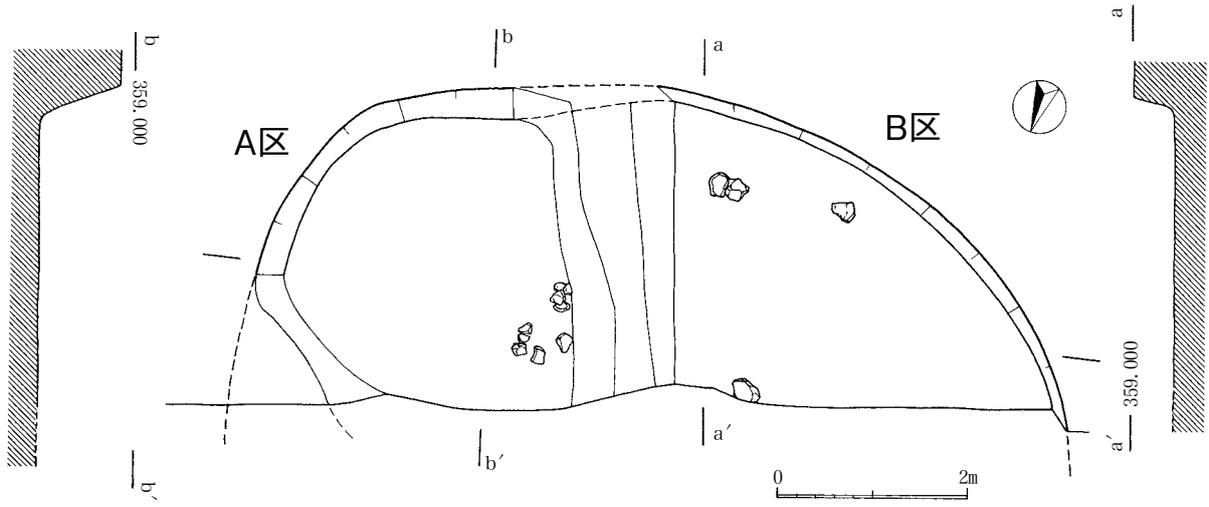


図10 SB 6実測図 (S=1:80)



SB 6 検出 (西から)



SB 6上面石 (東から)

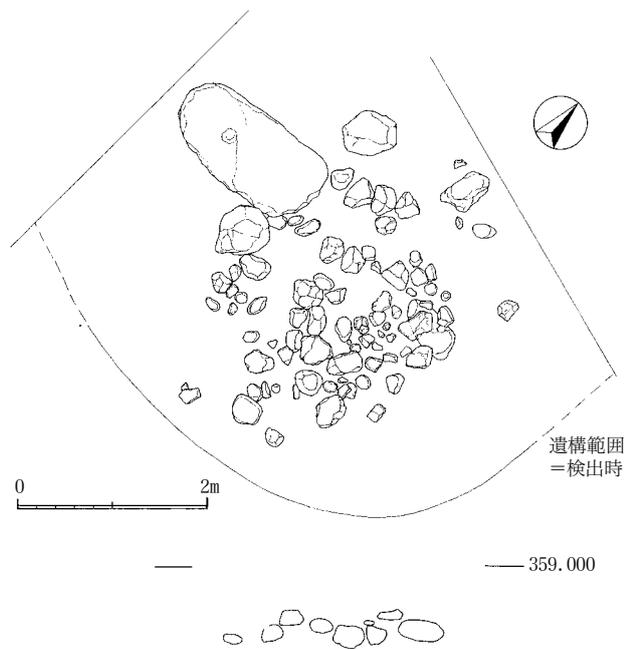


図11 SB 6上面石実測図 (S=1:60)



SB 6 (B区) 上面石検出状況 (西から)



SB 6 (B区) 上面石大型石取り上げ後 (西から)

・SB 7・8・13

調査区東端でSB 8がSB 13と切り合い、SB 7は東側に隣接する。SB 7は多くが調査区外となり、検出は一部である。平面形は隅丸方形とみられ、掘り込みは31cm、床面は明褐色のしまりのあるものであるが、覆土中からの土器の出土はほとんどなかった。また西に隣接するSB 13は、平面形は隅丸方形で、SB 7と同様に床面をはじめ遺構の検出は明確であるが、土器はほとんどみられなかった。北側はSB 8と、西側をSB 9に重複しているが、SB 13が遺物のないのに対して、SB 8は検出時から壁面を中心に土器が多く出土していたことから優先して掘り下げたため、SB 8がSB 13を切るかたちとなった。このため、遺構の前後関係は不明である。

SB 8は、北側のほとんどが調査区外になっており、遺構南壁の範囲と床面の一部を検出したのみである。平面形は長方形と想定され、西側の一部がSB 9と重複するのみで、規模は東西方向で5.8m、床面までの深さは63cmを測る。

覆土は礫石を含まない黒色土で、重機による掘削時から土器が出土しており、覆土中では弥生時代中期と後期の土器が混在する。遺構の検出は僅かであるが、住居の一辺の規模を確認することができた。床面はしまりのある良好な状態であり、床面に接する土器も数点みられた。

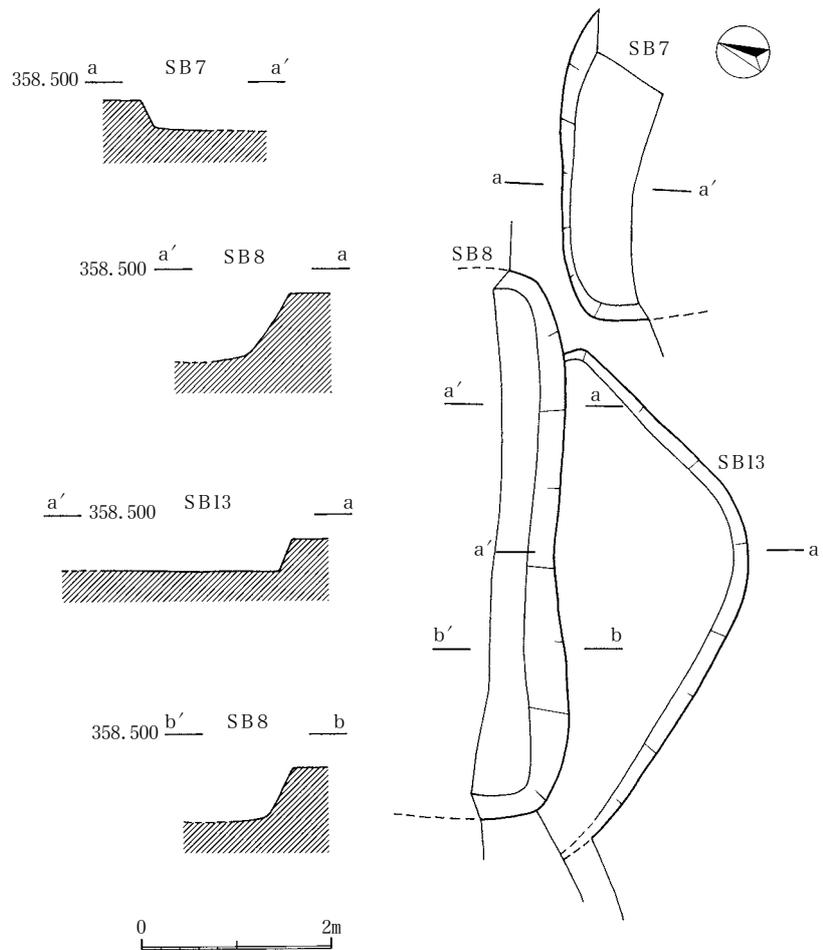


図12 SB 7・8・13実測図 (S=1:80)



S B 7・8・13 (北から)



S B 8・13 (北西から)



S B 8・13 (東から)



S B 7 (南から)

・ S B 9・10・11・12・14

B区中央、調査区全体では東側に位置する。検出時から複数の遺構が存在することが想定されたが、平面からの検出が困難であったため、遺構の範囲に南北方向のトレンチを設定し確認を行った。

トレンチでは約35cm掘り下げたところ、南側で床面を確認した。さらに北側では重複する別の遺構を確認した。トレンチの上面で確認した遺構は壁の検出状況から、住居跡が3軒が切り合っているものと判断した (S B 9・10・12)。

各遺構での床面のレベル差はほとんど見られなかったが、床面および壁面の検出は明確である。なお、出土土器は、上面の遺構の床面検出レベルまで全体を下げていることから、下遺構 (S B 11) の覆土を含め、床面のレベルまでの範囲をS B 9・10・12覆土出土としている。遺構は、S B 10が東西方向で約3.4mの方形、S B 9は西側をS B 10に、東側を13に切られ、方形とみられるがはっきりとはしない。S B 14はS B 10に重複し、東西方向で約5.4mの楕円形とみられる。

ここで検出した遺構の切り合いは、上面検出遺構S B 9→S B 10→S B 12→S B 14、これに重複して下面遺構S B 11である。

下の遺構については、先にトレンチを入れて床面の確認を行おうとしたが、予想以上に深かさがあったため、遺構の範囲を全体的に下げた。上の遺構の床面の高さまでは覆土中に礫石はみられなかったが、下の遺構の覆土の高さとなったあたりから覆土中に礫石が混じるようになった。この段階から特に土器は形の残るものはほとんどみられず礫石と混在している。遺構の範囲が広いこともあり、調査区内で一番土器が集中している場所である。

SB11は遺構の中では最も掘込みが深く、検出面からは約100cm、重複するSB9の床面からは65cmを測る。壁面はほかの遺構と同様に明瞭であるものの、覆土中には礫石が多く、床面も礫石を含んでおり明確ではない。

SB12はSB10に重複するが、その下にもう1軒(SB14)検出された。上面の検出では、方形の遺構として検出し(SB12)、床面が出た時点で確認されたものである(SB14)。SB14はSB11と同様に覆土は礫石を多く含み、その中に土器が混在している状況であった。なお、覆土下層からは磨製石斧(図20-1)1点と黒曜石の剥片が出土している。

SB11・14が弥生時代中期、上面のSB9・10・12が後期と考えられる。なお、遺構をすべて住居としているが、いずれも一部の検出であることから、炉などの住居に伴う施設等を確認できたものはない。この中で特にSB11

については、東側の検出から円形の遺構と判断したが、西側の検出がはっきりとはしなかったことから、西側での別遺構の存在、または覆土の状況から大型の溝などの別の遺構である可能性も考えられる。出土土器は弥生中期と後期のものが混在している状態であったが、北側壁面から遺構の重複の確認をしたものである。

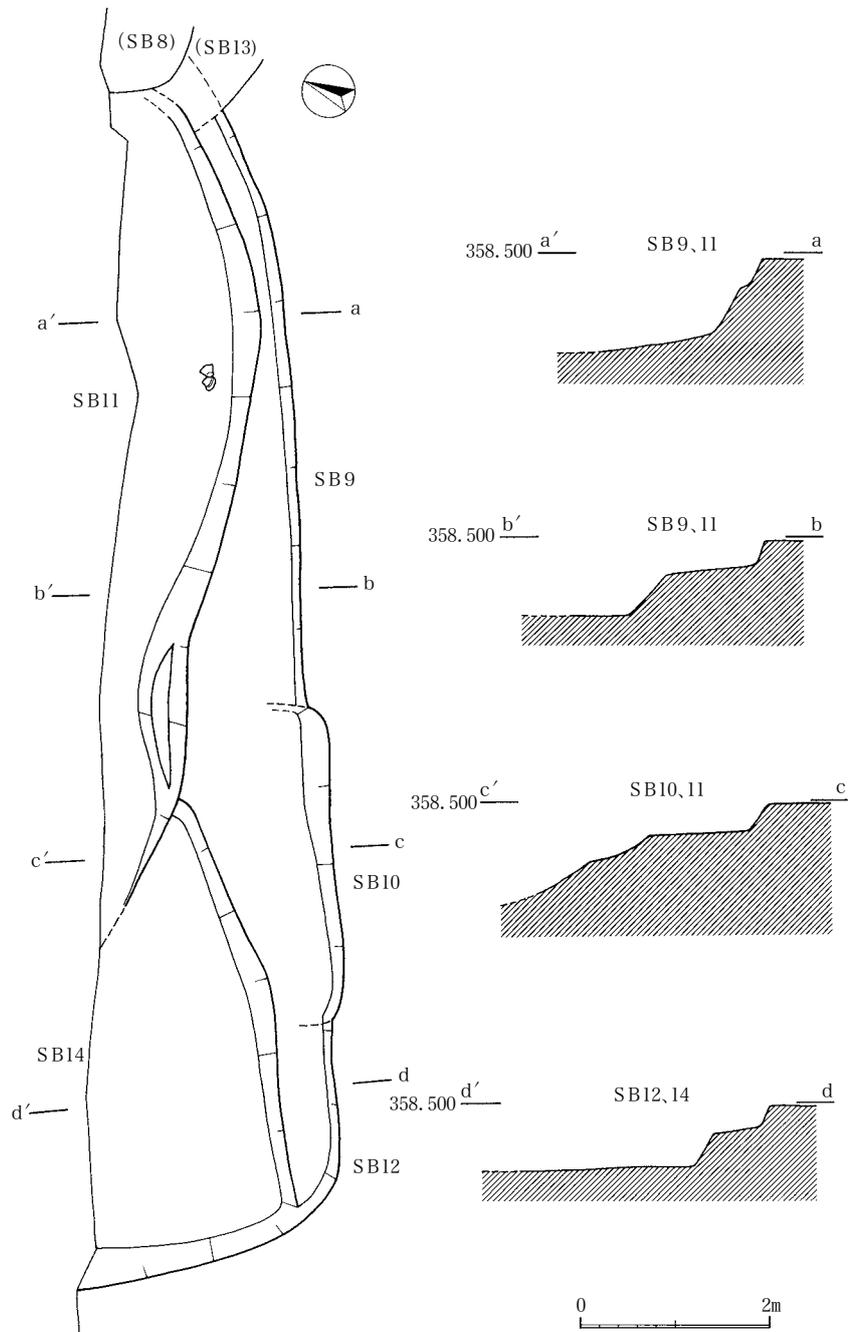


図13 SB9・10・11・12・14実測図 (S=1:80)



S B 9～12 (南東から)



S B 9～12 (南西から)



S B 9～12 (北西から)



S B 10・12・14 (南東から)



S B 9・11 (北西から)



S B 11底面土器出土状況 (北東から)

・SD1・2

調査区西端に位置し、ほぼ東西方向に2本が平行する。SD1の方がやや大きく、検出範囲での最大幅100cm、SD2は約65cmである。遺構の検出範囲がごく一部であることから全体の様子は不明であるが、検出面の高さは調査の中で一番高く、地形から西(北西)方向が上流となる。検出時から礫石があり底面まで多く入っており、土器も底面まで全体的にみられるが、礫石と混在していることからほぼ破片である。土器は弥生土器、土師器、須恵器がみられ、今回の調査の中では唯一、弥生時代中期・後期、古代の各時期のものが覆土中に混在するものであった。

SD1・2ともに遺構検出時から水が湧き、掘り下げは、土・礫石と水を一緒に出していく状態であった。覆

土は黒褐色土の単層で、各時代の土器が分かれて堆積した様子はみられない。

SD1は東西方向にあり、調査範囲ではまっすぐにのびるとみられる。SD2は西側の調査区外ではSD1と平行するものの、東側はやや北に向かい、洗車機跡とSB2に重複し検出がなくなる。

検出が一部であり全体の様子は不明であるが、覆土中の土器から、調査区内のほかの遺構（弥生中期）から以降（古代）の時期がみられ、古代については隣接地にて確認されていることから、この辺りの遺跡の時期には存在していたことがうかがわれる。また、方向からは自然地形に沿って造られたことも考えられ、遺跡が南側で終息する可能性があるなかで南側に伸びることから、遺跡の範囲を見る上で一考となろう。



SD1・2(北東から)

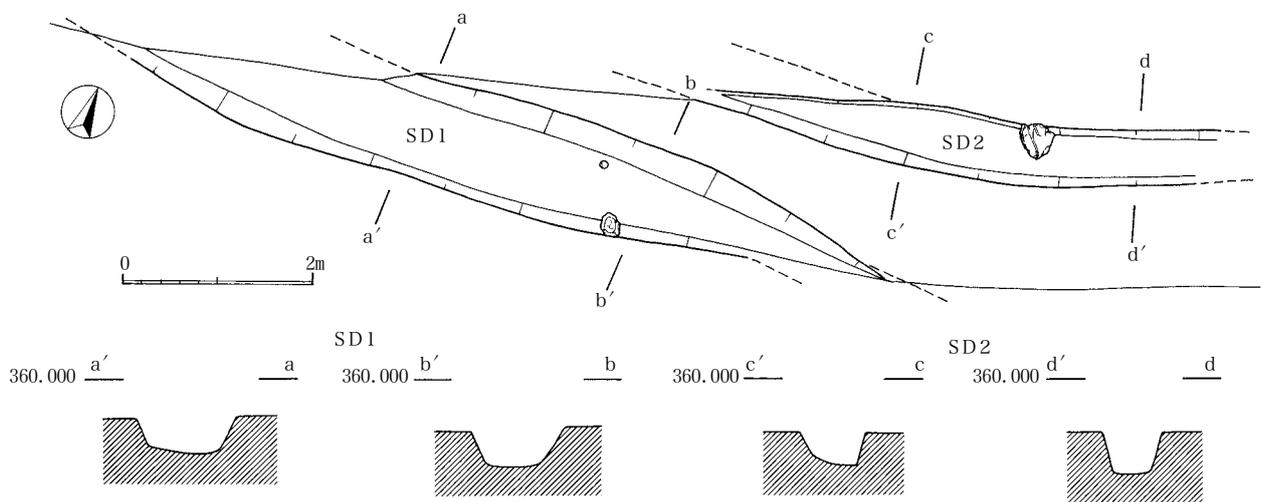


図14 SD1・2実測図(S=1:80)



SD1(東から)



SD2(北東から)

3 遺物

1 土器

出土総量は、268,140g。弥生時代中期・後期を中心に、古墳時代・平安時代～中世のものが出土した。遺構に伴うのは弥生時代・古墳時代である。土器は破片がほとんどであることから、今回図版を掲載したものは全体の内の一部となっている。土器図版は、時期を分けずに出土遺構別にして掲載した。なお平安時代～中世の土器類の図版掲載はないが、土師器・須恵器・陶器が出土している。

本項では、本調査での主体である弥生時代中期・後期について述べる。

〈弥生時代中期〉

出土数が多く、形態・文様が判断できる器種は壺・甕であり、このほかに特徴的なものとして赤彩がみられる。

・壺：調査では多くみられ、頸部を中心に比較的形が残る。

施文位置：①全体（3・11・12・28・70・72・73・74・76） → 文様：懸垂文・ヘラ横線・山形文・縄文
②口縁～頸部（30・31・34・42・43・100） → ヘラ横線・突刺・凸帯貼付・縄文
③頸部のみ（4・49・69・101） → ヘラ横線・縄文

①全体に文様のあるものでは、懸垂文の縦方向の文様は頸部が細く口縁が外側に広く開いた形であるが、横沈線・山形文など横方向の文様では、頸が短く太くなる（3・73）。②は頸部がほとんどであるため、胴部の様子は不明であることからこのように分けたが、頸部直下または間があいて胴部の施文が推測されるものである。③は頸部のみの横線を中心とした施文であるが、69はこれに刺突があり、頸部がかなり短く、口縁の外反と口縁部自体が小さくなる。

口縁は単純口縁と受口口縁（3・71・100）があり、頸部以下の文様は口唇部を含め、ほとんどに縄文が施されるが、横線文（突刺文）の30・73では見られない。また、13・41は広口の口縁部内側に幅約7cmの突起が付いており、41には範囲は不明であるが縄文がみられる。

・甕：小型で胴部上半に文様のあるものと、頸部直下から波状文が施されるもの（破片実測なし）が多い。小型のものは、櫛描波状文の下に縦位羽状文が施されたもの（83）、縄文にヘラ描きの文様（85・86）である。

受口口縁（32）は縄文にヘラ描文、胴部は不明。

・赤彩：鉢（60・82）60は口縁部に2個1対の貼付け、82はヘラ描きの山形文が描かれた上に赤彩で2点とも内面にも赤彩がある。壺（49）は磨耗のため明確ではないが赤彩の可能性はある。70は文様（沈線）の中に僅かに赤彩がみられる。

〈弥生時代後期〉

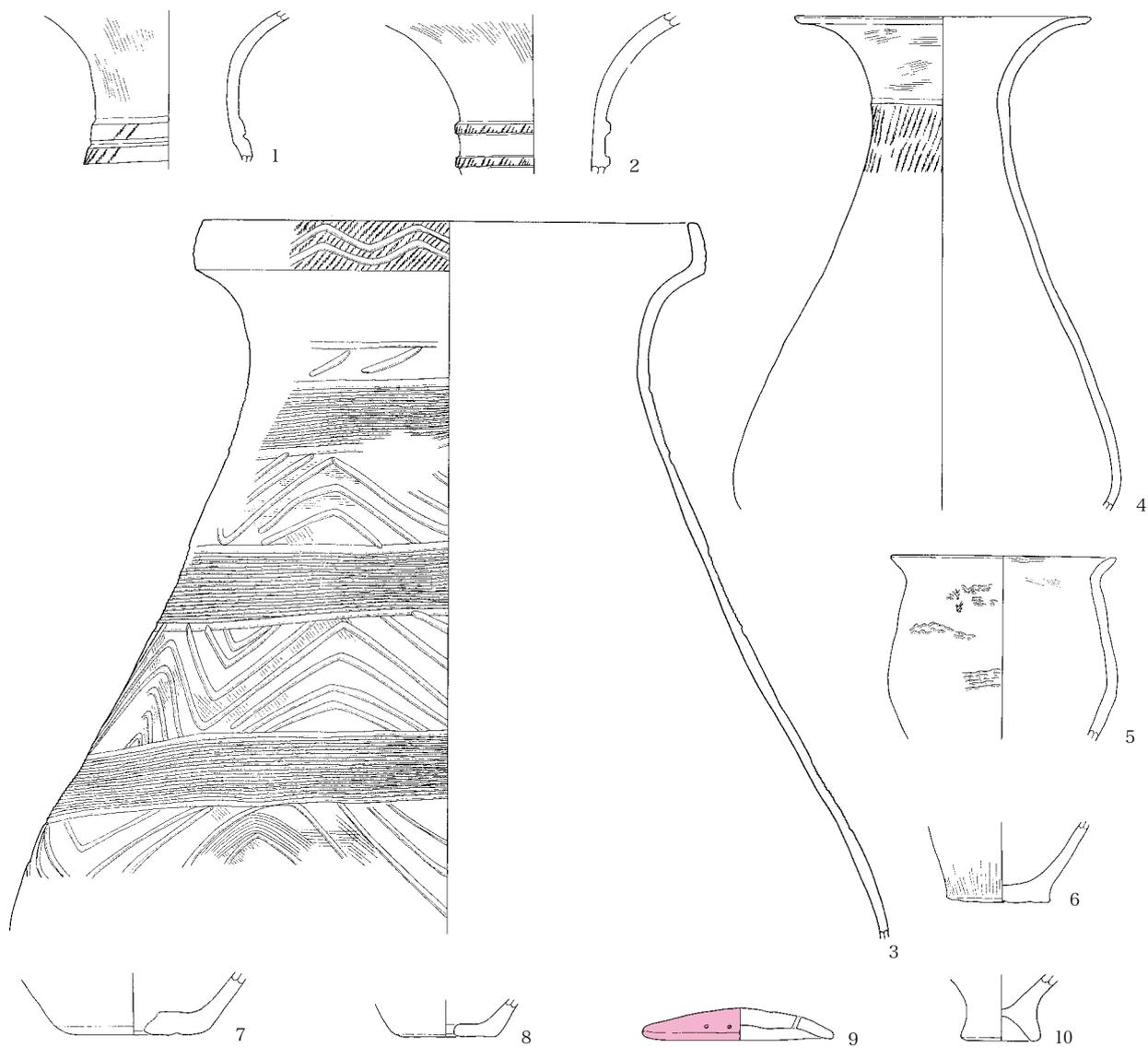
当期の遺構からの出土で破片は多いものの、形態がわかるものが特に少ない。よって、赤彩・文様にて述べる。

・赤彩：壺は胴部が張り下半に稜部のあるもの（53）と102は磨耗が著しく明確でないが櫛描廉状文かT字文が推定される。高坏は、坏部（107）と脚部である。

・櫛描波状文：甕（40・87・104）は、器形は頸部下から胴部が丸く張るもの（40）と口縁部と胴部がほぼ同じ幅のもの（104）がある。

弥生時代は、中期後半・栗林式と後期・箱清水式である。今回は時期の連続性は確認されず、中期・後期にそれぞれ存在するものである。

SB2(1~10)



SB3(11~19)

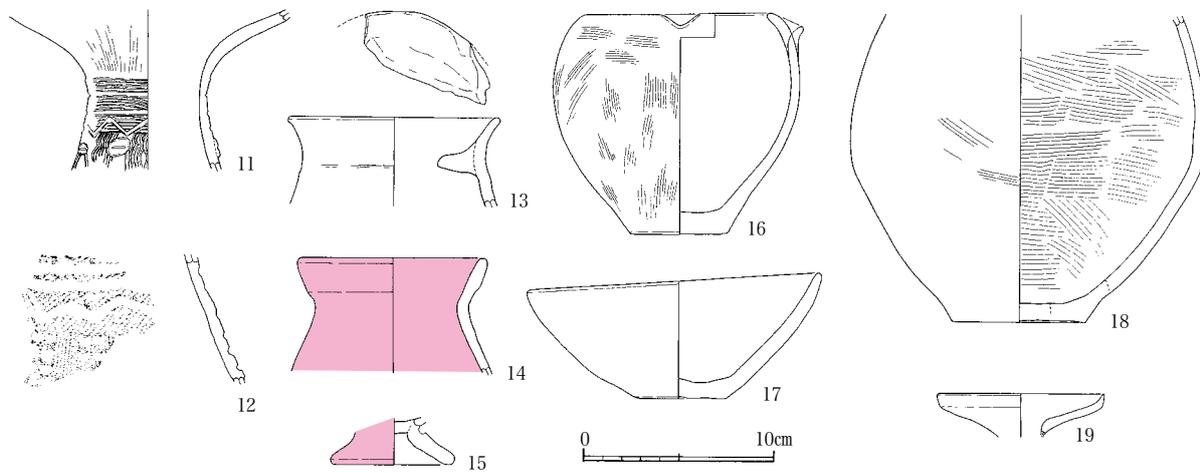


图15 土器実测图 (SB2·3) (S=1:4)

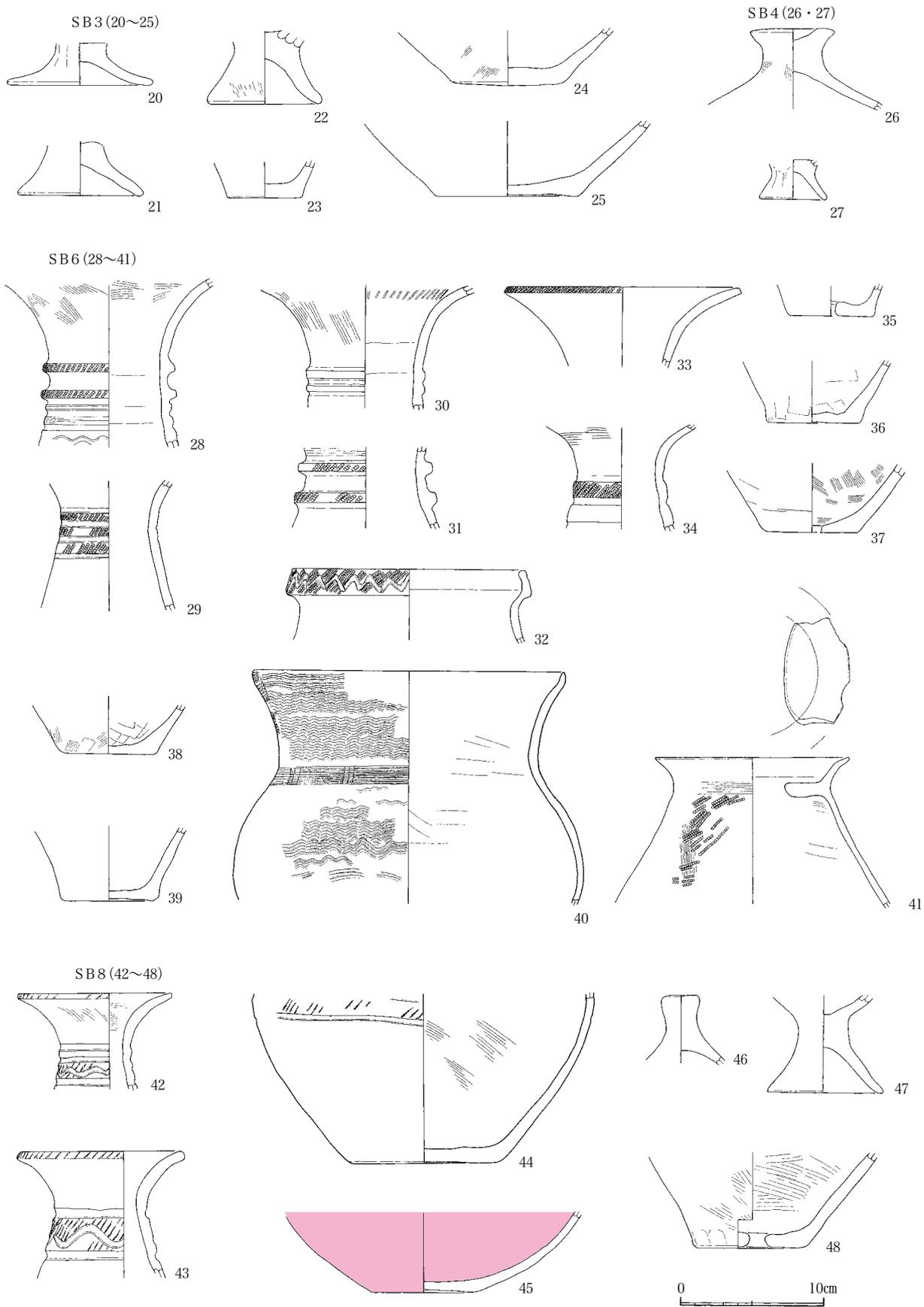
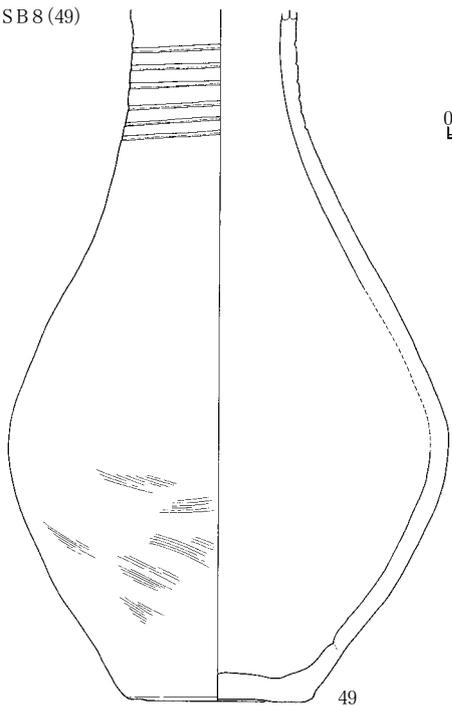
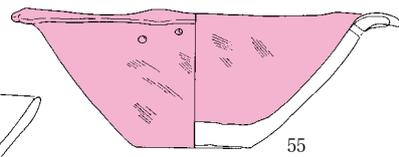
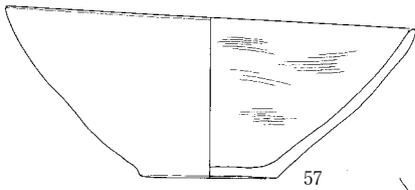
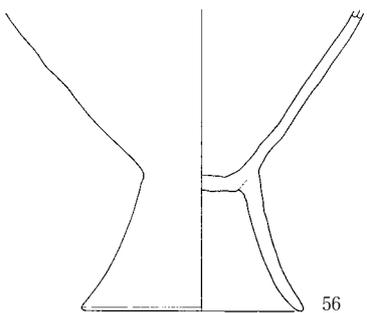
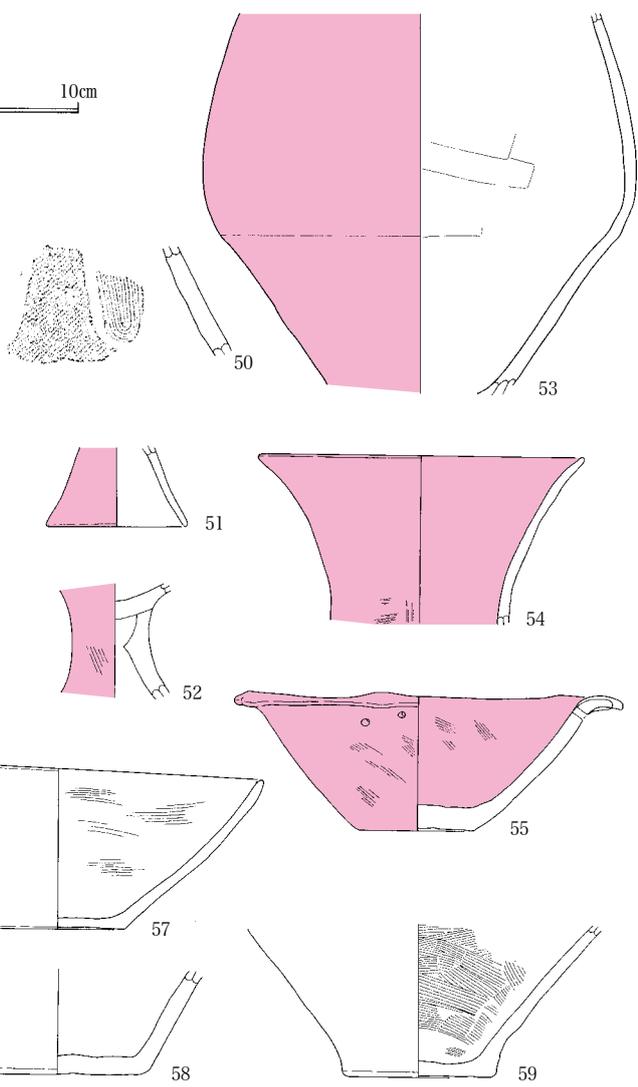


图16 土器实测图 (SB 3 · 6 · 8) (S=1:4)

SB 8 (49)



SB 9 (50~59)



SB 11 (60~68)

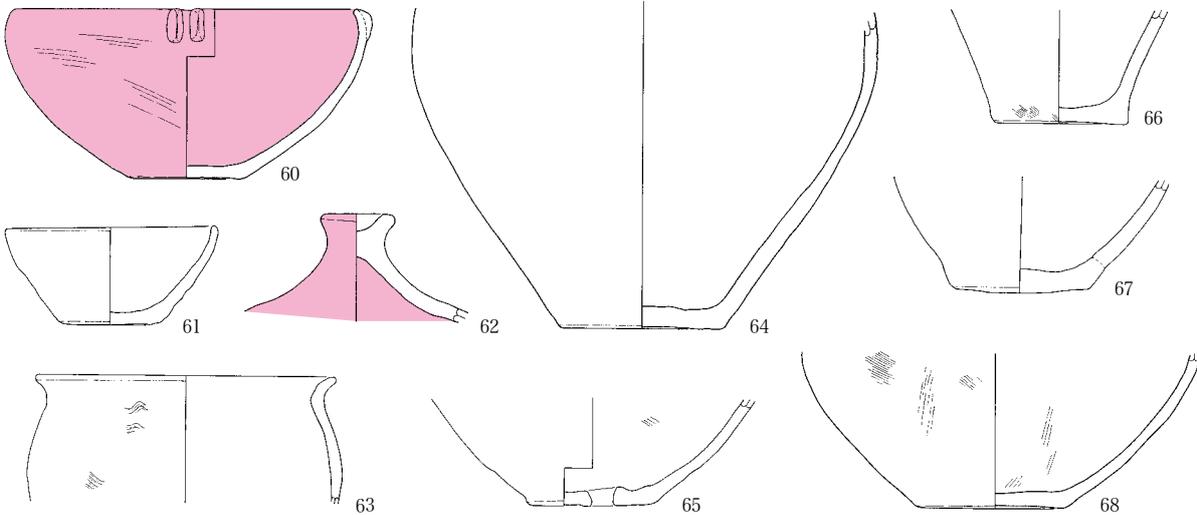


图17 土器实测图 (SB 8 · 9 · 10) (S = 1:4)

SB11(69~86)

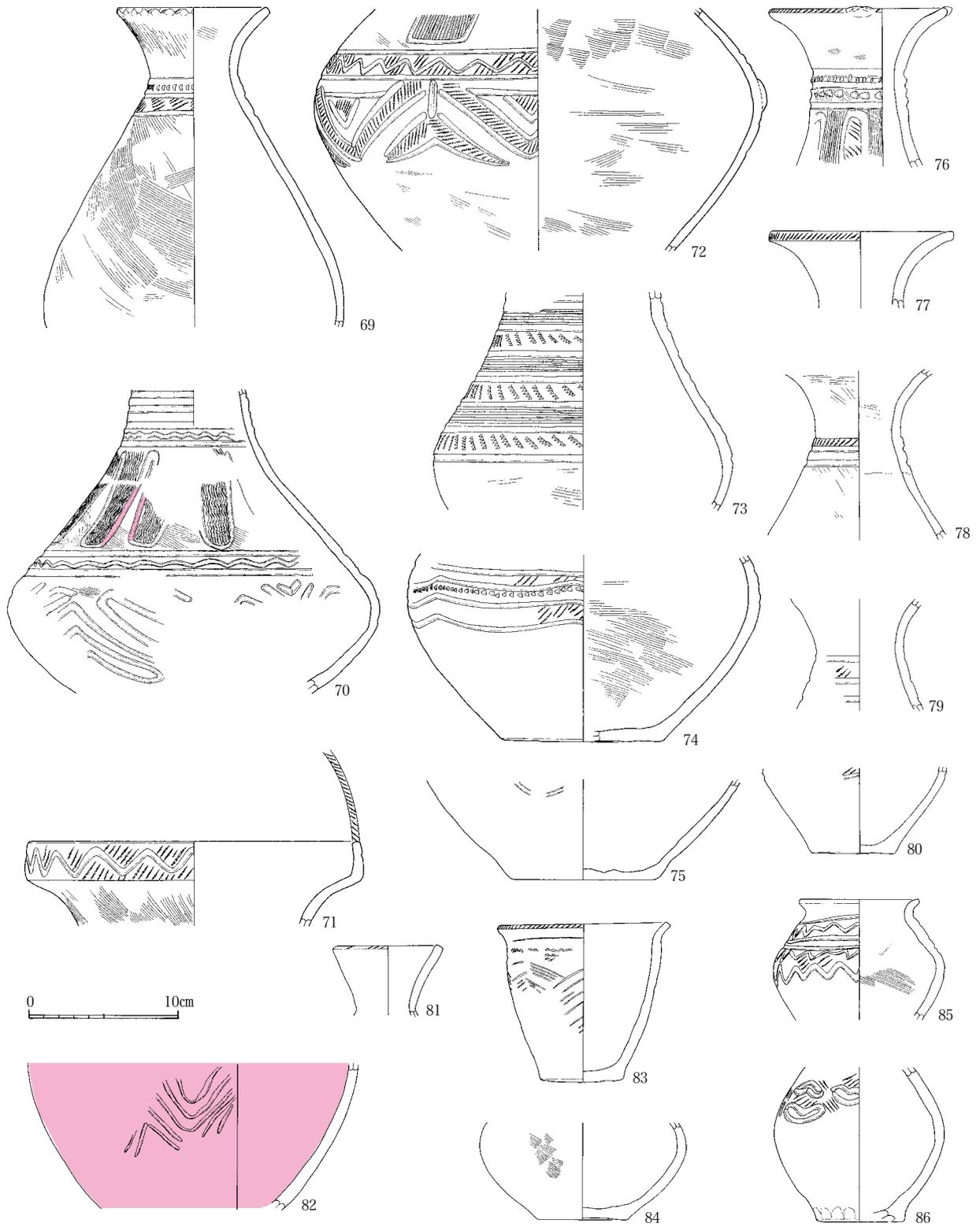


图18 土器实测图 (SB11) (S=1:4)

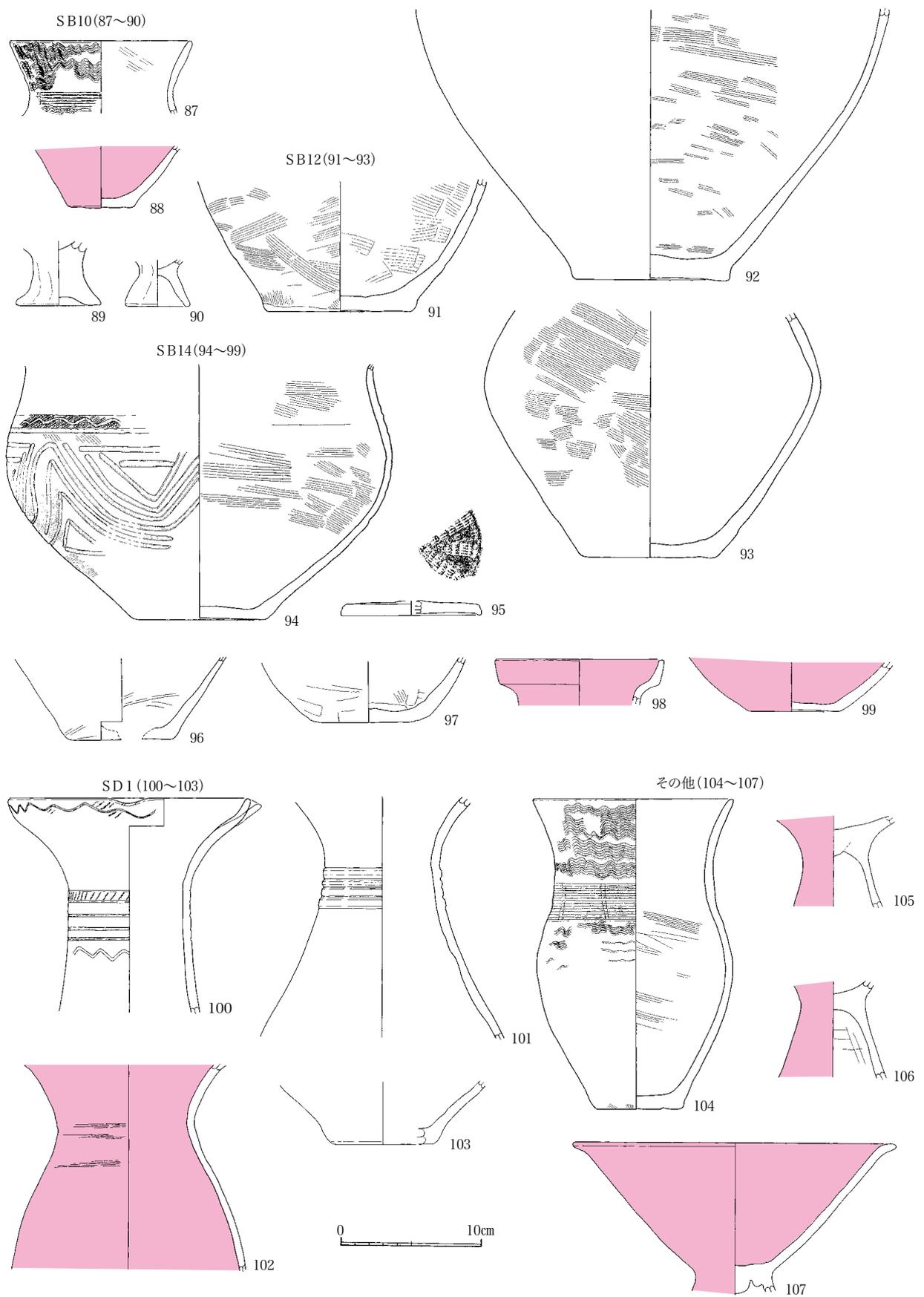


図19 土器実測図 (SB10・12・14、SD1、検出ほか) (S=1:4)

表2 土器観察表

図 版 番号	時 期	種 別	器 種	残存部		調整・その他	出土遺構		
				部 位	量		遺 構	位 置	
15	1	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部	1	縄文・沈線	SB 2	覆土
	2	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部	1	縄文・沈線	SB 2	覆土
	3	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～胴部	1/2	縄文、篋山形文・横沈線	SB 2	床面
	4	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～胴部	1/2	縄文、頸部沈線	SB 2	覆土
	5	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/3	波状文	SB 2	覆土～床直
	6	弥生時代後期	弥生土器	甕	底部	1	ハケ	SB 2	覆土
	7	弥生時代後期	弥生土器	甌	底部	1/2	単孔	SB 2	覆土～床直
	8	弥生時代後期	弥生土器	甌	底部	1	単孔	SB 2	覆土～床直
	9	弥生時代後期	弥生土器	蓋	全	1	外：赤彩	SB 2	覆土
	10	弥生時代後期	弥生土器	高坏	脚部	1	内/外：赤彩	SB 2	覆土
	11	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部	1/2	櫛横線、篋山形文、懸垂文・浮文	SB 3	覆土下～床直
	12	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部	1/5	縄文・篋沈線、櫛懸垂文・刺突	SB 3	覆土下～床直
	13	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～頸部	1/5	ハケ、口縁内側：突起1	SB 3	覆土下～床直
	14	弥生時代後期	弥生土器	壺	口縁～胴部	1	内/外：赤彩	SB 3	覆土下～床直
	15	弥生時代後期	弥生土器	高坏	脚部	2/3	外：赤彩	SB 3	覆土下～床直
	16	弥生時代後期	弥生土器	片口	全	3/4	ハケ	SB 3	覆土下～床直
	17	弥生時代後期	弥生土器	鉢	全	1	ミガキ	SB 3	床面
	18	古墳時代後期	土師器	壺	胴部～底部	1	ミガキ	SB 3	覆土下～床直
	19	古墳時代前期	土師器	器台	受部	1/3	ミガキ	SB 3	覆土上層
16	20	弥生時代後期	弥生土器	台付甕	台部	1/2	ナデ	SB 3	覆土上層
	21	弥生時代後期	弥生土器	台付甕	台部	1/2	ナデ	SB 3	覆土上層
	22	弥生時代後期	弥生土器	台付甕	台部	1	ハケ→ナデ	SB 3	覆土上層
	23	弥生時代後期	弥生土器	甕	底部	1	ミガキ	SB 3	覆土下～床直
	24	弥生時代後期	弥生土器	壺	底部	1	ハケ	SB 3	覆土下～床直
	25	弥生時代後期	弥生土器	壺	底部	1/2	ナデ	SB 3	覆土下～床直
	26	弥生時代後期	弥生土器	蓋	つまみ部	1	ナデ	SB 4	覆土
	27	弥生時代後期	弥生土器	台付甕	台部	1/2	ナデ	SB 4	覆土
	28	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部	1	赤彩、頸部：貼付凸帯・縄文・山形文	SB 6	床面
	29	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部	1/2	縄文・沈線	SB 6	覆土下～床直
	30	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部	1	口縁：縄文、口縁内側：ヘラ刺突	SB 6	覆土～床直
	31	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部	1/2	頸部：貼付凸帯・縄文	SB 6	覆土下～床直
	32	弥生時代中期	弥生土器	甕	口縁～頸部	1/4	口縁：縄文・ヘラ沈線	SB 6	覆土下～床直
	33	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁部	3/4	口唇部：縄文	SB 6	覆土下～床直
	34	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部	1	ヘラ沈線・縄文	SB 6	覆土～床直
	35	弥生時代中期	弥生土器	甌	底部	1/2	ナデ、単孔	SB 6	床面直～床面
	36	弥生時代中期	弥生土器	甕	底部	1	ナデ	SB 6	覆土～床直
	37	弥生時代中期	弥生土器	甌	底部	1	ナデ	SB 6	覆土～床直
	38	古墳時代後期	土師器	甕	底部	1	ハケ	SB 6	覆土～床直
	39	弥生時代中期	弥生土器	壺	底部	1	ミガキ	SB 6	床面
	40	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/2	波状・廉状文	SB 6	床面直～床面
	41	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～胴部	1/8	胴部：縄文、口縁内側：突起1	SB 6	覆土～床直
	42	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～頸部	2/3	口唇：縄文、縄文・ヘラ沈線・山形文	SB 8	覆土下～床直
	43	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～頸部	1/2	口唇：縄文、縄文・ヘラ沈線・山形文	SB 8	覆土下～床直
44	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	1/3	縄文・沈線	SB 8	床面	
45	弥生時代後期	弥生土器	鉢	底部	1	内/外：赤彩	SB 8	床面直～床面	
46	弥生時代後期	弥生土器	蓋	つまみ部	1	ナデ	SB 8	覆土下層	
47	弥生時代後期	弥生土器	高坏	坏～脚部	2/3	ミガキ?	SB 8	床面直～床面	
48	弥生時代後期	弥生土器	甌	底部	1	ハケ→ナデ	SB 8	覆土下層	
17	49	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸～底部	4/5	頸部沈線、表面磨耗(赤彩?)	SB 8	床面直～床面
	50	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部	1/5	懸垂文	SB 9	覆土
	51	弥生時代後期	弥生土器	高坏	脚部	2/3	赤彩	SB 9	覆土上層
	52	弥生時代後期	弥生土器	高坏	坏下～脚部	1/2	赤彩	SB 9	覆土下層

図 版 番号	時 期	種 別	器 種	残存部		調整・その他	出土遺構		
				部 位	量		遺 構	位 置	
17	53	弥生時代後期	弥生土器	壺	胴部	1/2	赤彩	SB 9	覆土上層
	54	弥生時代後期	弥生土器	壺	口縁部	1	内/外：赤彩	SB 9	確認トレンチ
	55	弥生時代後期	弥生土器	鉢	全	3/4	内/外：赤彩、穿孔（2ヶ1対：2）	SB 9	確認トレンチ
	56	弥生時代後期	弥生土器	高坏	坏～脚部	2/3	ミガキ？	SB 9	確認トレンチ
	57	弥生時代後期	弥生土器	鉢	全	2/3	ミガキ	SB 9	覆土下層
	58	弥生時代後期	弥生土器	甕	底部	1/3	ナデ	SB 9	覆土下層
	59	弥生時代後期	弥生土器	壺	底部	1	ミガキ	SB 9	確認トレンチ
	60	弥生時代中期	弥生土器	鉢	全	1/5	内/外：赤彩、貼付2個1対	SB11	覆土～床直
	61	弥生時代後期	弥生土器	坏	全	1	ハケ→ミガキ	SB11	覆土上層
	62	弥生時代後期	弥生土器	蓋	つまみ部	1	内/外：赤彩	SB11	覆土上層
	63	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/4	波状文	SB11	覆土上・下
	64	弥生時代後期	弥生土器	壺	胴部～底部	1/3	ミガキ	SB11	覆土～床直
	65	弥生時代後期	弥生土器	甌	底部	1	ミガキ	SB11	覆土上・下
	66	弥生時代後期	弥生土器	甕	底部	1	ミガキ	SB11	床面直～床面
67	弥生時代後期	弥生土器	甕	底部	1	ミガキ	SB11	床面直～床面	
68	弥生時代後期	弥生土器	壺	底部	1	ハケ→ミガキ	SB11	覆土～床直	
18	69	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～胴部	1/2	口唇：ヘラ刺突、沈線・縄文・刺突	SB11	覆土～床直
	70	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸～胴部	1/3	懸垂文	SB11	覆土下層
	71	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁部	1/4	縄文・ヘラ沈線	SB11	覆土上層
	72	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部	3/4	懸垂文	SB11	床面直～床面
	73	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部	1/2	横沈線・刺突文	SB11	床面No.1
	74	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	1	縄文・ヘラ横線・刺突文	SB11	覆土～床直
	75	弥生時代中期	弥生土器	壺	底部	1/4	沈線	SB11	覆土下層
	76	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～頸部	1/4	懸垂文	SB11	床面直～床面
	77	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁部	1	口唇部：縄文	SB11	床面直～床面
	78	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸～胴部	1	頸部：縄文・沈線	SB11	覆土～床直
	79	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部	1	縄文・沈線	SB11	覆土～床直
	80	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	1	縄文・沈線	SB11	床面直～床面
	81	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁部	1	口唇部：縄文	SB11	覆土上・下
	82	弥生時代中期	弥生土器	鉢	胴部	1/5	内/外：赤彩・ヘラ描文	SB11	床面直～床面
83	弥生時代中期	弥生土器	甕	全	2/3	口縁：縄文、波状・羽状文	SB11	覆土	
84	弥生時代中期	弥生土器	壺	胴部～底部	1/3	ミガキ	SB11	覆土上層	
85	弥生時代中期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1	縄文・ヘラ描き文	SB11	覆土～床直	
86	弥生時代中期	弥生土器	甕	胴部～底部	1/2	縄文・ヘラ描き文	SB11	床面直～床面	
19	87	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁～頸部	3/4	波状・廉状文	SB10	確認トレンチ
	88	弥生時代後期	弥生土器	鉢	底部	1	赤彩	SB10	確認トレンチ
	89	弥生時代後期	弥生土器	台付甕	台部	1	ハケ	SB10	覆土
	90	弥生時代後期	弥生土器	台付甕	台部	3/4	ハケ	SB10	覆土上層
	91	弥生時代後期	弥生土器	甕	底部	1	ハケ	SB12	覆土下層
	92	弥生時代後期	弥生土器	壺	胴部～底部	2/3	ミガキ	SB12	覆土上層
	93	弥生時代後期	弥生土器	壺	胴部～底部	2/3	ハケ	SB12	覆土上層
	94	弥生時代中期	弥生土器	広口壺？	胴部～底部	1/2	縄文・ヘラ沈線・山形文	SB14	覆土下層
	95	弥生時代中期	弥生土器	蓋	全	1/4	櫛描短横線文	SB14	床面直～床面
	96	弥生時代後期	弥生土器	甕	底部	1	ミガキ 底部：焼成後穿孔	SB14	床面直～床面
	97	弥生時代後期	弥生土器	甕	底部	1	ミガキ	SB14	床面直～床面
	98	弥生時代後期	弥生土器	壺	口縁部	1/2	内/外：赤彩	SB14	覆土
	99	弥生時代後期	弥生土器	鉢	底部	1	内/外：赤彩	SB14	床面直～床面
	100	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～頸部	1/4	縄文・沈線	SD 1	底
	101	弥生時代中期	弥生土器	壺	頸部	1/2	沈線	SD 1	覆土
	102	弥生時代後期	弥生土器	壺	頸～胴部	2/3	赤彩	SD 1	覆土
	103	弥生時代後期	弥生土器	壺	底部	1/2	赤彩	SD 1	覆土
104	弥生時代後期	弥生土器	甕	全	2/3	波状・廉状文		トレンチ	
105	弥生時代後期	弥生土器	高坏	坏下～脚部	1/3	赤彩		溝	
106	弥生時代後期	弥生土器	高坏	坏下～脚部	1/4	赤彩		検出面	
107	弥生時代後期	弥生土器	高坏	坏部	1/4	内/外：赤彩		検出面	

2 石器 (図20)

・太型蛤刃石斧

刃部は端を一部残すのみで、刃部を中心に全体の約1/4が欠損する。全長は11cm、刃部幅は約5.2cmと推測される。

基部から2cmほど下の位置には、円形の敲打によるくぼみがみられる。両面にあり、片方は2.2cmほどの範囲であるが、反対面はこれよりも小さく大きさが異なる。また、側面にも敲打痕があるが、表面がくぼむ程はない。

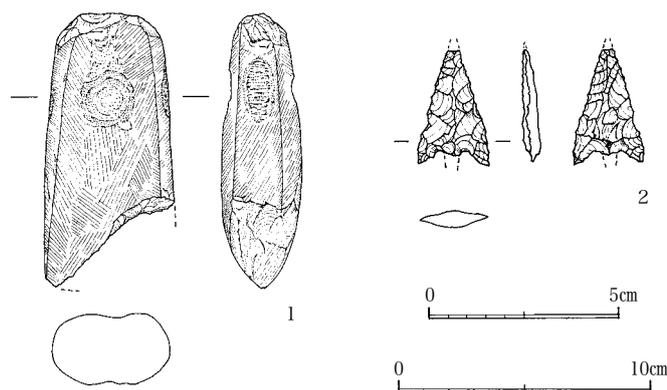


図20 石器実測図 (1 : S=1:3、2 : S=1:2)

・打製石鏃

先端と基部の一部を欠損する。チャート製で、長さは残存部で3.0cm、幅は完形で1.8cmを測る。

この他、太型蛤刃石斧と同じSB14とその上面のSB12から黒曜石の剥片（写真のみ）が出土している。今回の調査では黒曜石製の石器はみられなかった。

3 土製品 (図21)

・土製円板

いずれも土器転用であり、1は中央に穿孔がされ、3は片側から途中までとなっている。1は湾曲し、内側にはハケ目が残る。2は穿孔はみられないが、表面にはヘラ沈線が1条と櫛描き状の沈線が平行してみられる。径は1・2が4.3cmほど、3はこれよりも小型で2.7cmである。

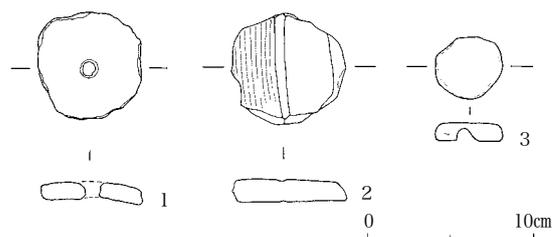


図21 土製品実測図 (S=1:3)

表3 石器・土製品観察表

図	No.	時期	種別	名称	残存量	重量(g)	形態等	出土遺構	
								遺構	位置
20	1	弥生中期	石器	太型蛤刃石斧	1/2	284.4	変質輝緑岩、刃部欠損	SB14	覆土下層
	2	弥生中期	石器	打製石鏃	3/4	1.6	チャート、先端・茎部欠損	SB 2	覆土
21	1	弥生中期	土製品	土製円盤	完	13.0	土器転用、中央穿孔	SB 6	床面
	2	弥生中期	土製品	土製円盤	完	22.9	土器転用、表面沈線	SB 9	覆土下層
	3	弥生中期	土製品	土製円盤	完	5.3	土器転用、穿孔途中	SB11	覆土上層
写真のみ		弥生中期	石器	剥片		5.0	黒曜石	SB14	覆土下層
写真のみ		弥生中期	石器	剥片		1.5	黒曜石	SB14	覆土下層

IV まとめ

調査では、弥生時代中期・後期を中心に古代までの遺構・遺物を検出した。調査面積は380㎡、調査区が東西に細長い形であるため、遺構の検出はすべて一部となった。しかし、確認した遺構の数は多く、調査区内全体に広く切り合った状態で検出された。また、各遺構は掘り込みが深く土器の出土量が多い。しかしその多くは破片であり、原形を残すものはほとんどみられなかった。接合作業においても出土量に対して接合するものは少ない状態であった。

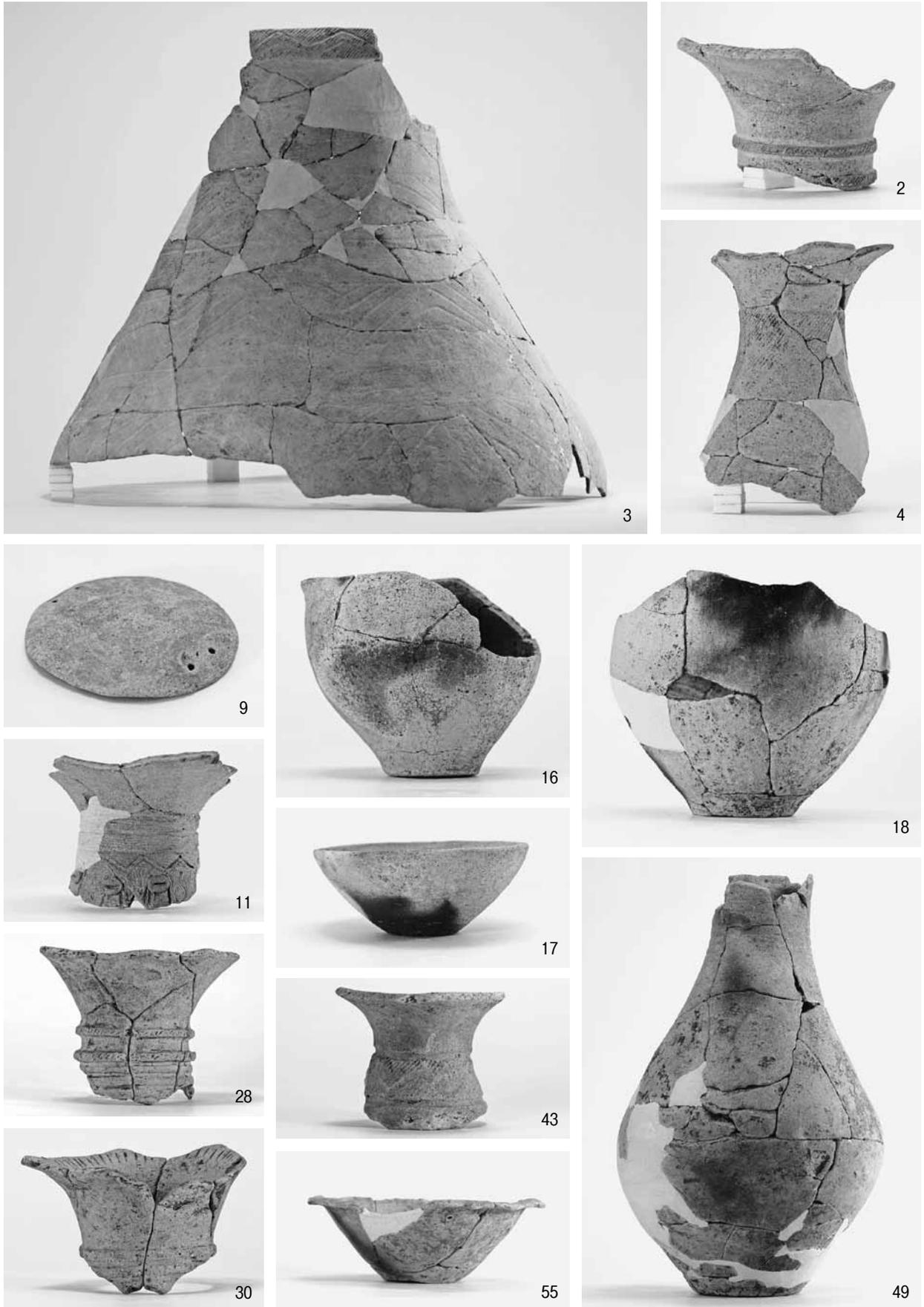
遺構は、南北に狭い調査区の中でも北側で集中しており、この中で住居跡と判断したのは全部で13軒。全体を検出できたものがないために炉や柱跡などの検出はなく、すべて遺構の南端の一部を確認したにとどまる。検出面から床面までの深さは35cm～75cmを測る。時期は弥生時代中期と後期である。

住居跡は重複しているものが多く、遺構が密集している様子がみられた。弥生時代中期の住居（S B 2）からは、床面に接して大型の壺の上半分が立てられた状態で検出され、同じく中期の住居（S B 6）では、140cmの大型の平石とその下に30～50cm大の石が混入していた。住居の廃棄後のものと判断されるが、性格については不明である。調査区東側は遺構の重複が多く、床面から下の遺構が検出される状態であった。検出位置により大きく上面と下面に位置するものにわけられ、出土土器量での差はみられなかったが、下面の遺構の覆土は礫石を多く含んでいる。流路の影響なども考えられるが、上面と同じく覆土中からは多量の土器が出土しており、覆土の状態以外はほかの住居跡との差はみられなかった。今回の調査では、このような堆積の違いについては、この範囲での調査区北壁での確認・記録を行ったのみで明らかにしえなかった。さらにこの中で大型の遺構となるS B 11については、住居以外の遺構である可能性も考えておく必要がある。

住居以外では調査区西側に東西方向の溝が2条検出された。検出時から覆土中に礫石が多く、底部まで入っている状態であった。土器は弥生中期から土師器・須恵器と古代までのものがみられる。これらの時期は混在していることから長期にわたり機能していたことがうかがわれ、遺構の方向からは地形に沿ってつくられたことが考えられる。

北西側の隣接地で行われた調査（平成6年度調査・徳間本堂原遺跡）では、弥生時代から平安時代の住居跡をはじめ、弥生時代の礫床墓や埋没古墳が確認されている。遺構の時期は今回のものと大きな違いはみられないが、ここでは調査時での湧水がみられなかったのに対して、今回の調査では検出時から常に水が湧く状態であったということは、遺跡の展開の考える上で一考となるであろう。本調査区の北側は過去の調査からも遺構が広がることが確認されているが、南側市立長野高校にて行われた試掘調査では遺構の確認が乏しく、遺跡の展開が見込まれていない。今回の調査の結果とこれらの状況をふまえれば、本調査区の南側付近が北側から広がる遺構範囲の端部となることがうかがわれ、その理由のひとつとして水が湧く場所となっていることが考えられる。

遺物写真 1



遺物写真2



番号=実測図番号に対応



图19-1

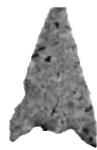


图19-2



黑曜石



1



2



3

图20

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん とくまほんどうはらいせき
書名	浅川扇状地遺跡群 徳間本堂原遺跡（2）
副書名	一般県道長野豊野線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第139集
編著者名	遠藤恵実子 飯島哲也
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL：026-284-0004 026-284-0106
発行年月日	2015（平成27）年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積	調査 起因
		市町村	遺跡番号					
とくまほんどうはらいせき 徳間本堂原遺跡	ながのけんながのし 長野県長野市 おおあざとくま 大字徳間 1068-2 他	20201	A-083	36° 40' 40"	138° 13' 16"	2014.11.13 ～2014.12. 2 2015. 1 . 8 ～2015. 2 . 14	380㎡	道路 改良
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
徳間本堂原遺跡	集落	弥生時代 後 期 中 期		竪穴住居 13		弥生土器、石器 土製品		
		弥生時代～古 代		溝 2 土 坑 3		弥生土器、土師器 須恵器		
要 約	扇状地の扇央に位置する集落。調査区が狭小であるため検出は一部であるが、遺構は密集している。また、検出面からの掘り込みが深く、遺構からの土器の出土量が多い。出土土器は弥生中期から古代までみられるが、弥生時代中期・後期を中心とした集落である。							

長野市の埋蔵文化財第139集

浅川扇状地遺跡群

徳間本堂原遺跡(2)

平成27年3月25日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 文化財課 埋蔵文化財センター
印刷 ほおずき書籍株式会社